

MOBIUS

—鏡の幻惑師—

芳田尚哉

さてさて、いつもの如くおいらだ。

もう説明なんていらねえよな。どうしても知りたいヤツはいるか？

.....ん、と.....いやがるのか。

おいらを虐めて楽しもうってだけじゃねえのか？ ホントに違うか？ 誓えるか？

.....ったく、しょうがねーな。

おいらの名前はマスター。横文字が嫌いってんなら、時を紡ぐ者、って呼んでくれや。

んじゃ、もうおいらの事はいいだろ？

さて、今回はあの `輝きの使者、の三人の話の続きだ。後日談って事にもなるんだろうが.....
本当にあのあとの話だからな.....。

だからよ、できれば前回の話を知っておいた方がいいんだけどよ.....。だいたい、知ってなきゃわからんぞ。

という事はだな、おいらも自己紹介なんてしなくてもよかったんじゃないか？ まあ、もうしちまったもんはしょうがねえけどよ。

おっと、話を戻すぜ。あのムーンライト・タワーを攻略した三人が次に対決するのは最後にちょっとだけ登場したアイツだ。

前回で残された謎や闇が今回で解決される.....はず、だってよ。謎ってあったか？ わからんけどよ.....。

でも今回はMLTが舞台じゃない。今回のメインは心の中.....鏡の中だ。なにせ、鏡の幻惑師だからな。

ところでよ、自分を見つめた事ってあるか？ ああ、別に鏡に自分を映してウツトリしろってわけじゃねえぞ。

自分を見つめるってのは意外としねえもんだよな。それに、なんだか怖い気もする。

それに加えて、勇気がいったりもするわけだ。

だいたい、鏡を見るっつう行為は勇気がいる事だったりもするわけだしよ。

だからといって、見て見ぬ振りをしちゃあいけねえ。どうしようと、そこに映ってるのは自分自身なんだからよ。自信があろうとなかろうと、自分って事に変わりはない。いくら取り繕ってもそればかりはな.....。

鏡を否定しちゃいけねえよ。時には姿だけじゃなく、心の内側も映すんだからよ。

で、この鏡の幻惑師に魅入られた少女ってのが、自分を見る事ができなかった悲しい少女なわけだ。

だいたい、近くに自分の鏡のような存在があったわけだからな。それは鏡とは似て非なるものなんだけどよ。それでも、最も鏡に近かったんだよな。

だからだろうよ、鏡の幻惑師を宿したのは。

おっと.....ここでこんなに語ってもしょうがねえやな。

そろそろ.....って、忘れちゃうとこだったぜ。今回もあの死神野郎の仲間が登場するんだ

そうだ。新しい仲間つか、なんつか……。だいたい、元々あいつらは四人組だしな。三人目の登場ってわけだ。

とにかく、はじまりだ。

あたしはまたこの場所に来ている。

ムーンライト・タワー（MLT）、

あたしのお父さんが殺された場所。

あたしの友達の友達が殺された場所。

あたしの友達の友達が人を殺した場所。

そして、あたしが友達と出会った場所。

複雑な場所になっちゃった……。

今までは特になんて事のない出来事だった。

家族が欠けても実感がなかった。

それに、こんな場所に興味もなかった。

だけど……。

だけど、今は違ってしまっている。

あの時の事を見てしまった。

あの時の事を知ってしまった。

そんな今は――

もう、戻れないのかな……。

お父さんがいなくなっても平気だって思ってた。

なにも感じないようにしようって思ってた。

それはやっぱり……悲しい事を感じないようにしようっていう自己防衛だったのかな……。

やっぱりお父さんが好き。

当時はあんな事を思ったりもしたけど……子どもだったのかな……。ううん、今でもだね、きっと。

あたしは子どものまま。なにも成長しないまま。

……まま、だった。

だけど、今は違うと思う。思いたい。

これからは変わっていこう。

お母さんとお姉ちゃんと一緒に、お父さんの分まで楽しく生きていこう。

楽しまないと、天国のお父さんも安心できないよね。もっと笑顔でいなくちゃ。

スマイルスマイル、だよ。

でも……。

この建物を見上げる。

ここでは色んな事があつたんだな……。

ほんの数日前だ。片手で数えられるくらい。

その日、そのたった一日であたしのこの建物に対する意識が変わった。

変えられてしまった、の方が正しいのかな。

もちろん、設計から完成まで様々な人が関わっている。それはわかる。そして、完成してからも多くの人に関わっている。

あたしもその一人なんだよね。

そう思うと、この変な建物も感慨深いものになってくる。

もう一度、もう一度最上階に行きたいな……。

でも、今は入る事さえできない。

あの時の現場検証でまだ封鎖されたままだ。

あの事件は、なにも解明されていない。

なにが起こったのか、誰にもわからないと思う。

突然人々が眠りについた。

それは、責任者だった高澤（こうさわ）さんもその中に含まれるので、当人にも理解できていない。

そして、人が三人消えた。

‘高澤威仁（たけひと）、

‘光月（こうづき）麻琴（まこと）、

‘光月鏡琴（みこと）、

この三人だ。

威仁君は……あの事件の首謀者——オプスキュリテだった。

あたしにわかるのはそれだけだ。

どうして彼があんな事をしたのか、どうしてあんな事ができたのか……そして、どうしてあの死神を知っていたのか。サッパリわからない。

でも、あたしの目の前であの死神に消されてしまった事は事実だ。そして現実だ。

死神に消される前、あたしたちがあその最上階に行った時、そこにいた威仁君はあたしが知っている威仁君じゃなかったように思う。なんだか別の人みたいだった。

そんなに親しくなかったから、勝手な思い込みで人物像をつくってしまっていたんだろうけど。

そんな事とは別次元のような感じもする。

だって、普通の人間があんな事できる？

あたしに変な能力を授けたんだよ。

変だよな……どう考えても。

そう、あたしは彼から——オプスキュリテと名乗っていた彼から能力を授けられた。なんでも

人の心を輝かせるという `ユニオ、という能力を。

あたしはこの能力を使って、闇に支配された人の心を輝かせ、人々を `輝きの園、とかいう所へ導かなければならない.....とかだった。

でも、実際はなんだかそのオプスキュリテの実験だったらしく、そんな場所はないんだそうだと。

すっかり騙されていたというわけだ。

それでも、あたしはその事に感謝している。

だって、この事がきっかけで友達ができただから。

嬉しかったよ。

謎に包まれたあの事件も、あたしにとってはいい事だったのかもね。

警察の方々、きっと解決できないだろうけど、頑張ってくださいね。

心の中で声援をおくってあたしはその場を離れる事にした。

この場所に長くいてもしょうがないしね。

さてと.....。

今日はなにをして時間を潰そうかな.....。

もうすぐ新学年だし、遊ぶなら今のうちだよな。

『ねえ、アナタの心は本当に輝いているの？』

えっ？

突然声がした。

でも.....誰もいない。

気のせい.....かな？

.....気のせいだよな。

やっぱりこの場所にきたせいかな.....。

きっとそうだ。

そういう事にしておこう！

で、MTLをあとにしても、別段する事もない。何処に行こうかな.....。

とりあえずその辺をブラブラとする。

ちょっと遠いけどAMA水族館にでも行こうかな.....。

あ、そういう所って一人じゃ行きづらいな.....。やっぱり友達とか彼氏とかと一緒にないとね.....。

はあ.....。

彼氏なんていないし.....ってそんな事はどうでもいいから——友達か.....。

そういえば、トキと彌季（みき）ちゃんはなにしてるんだろうな.....。

あ、でも……トキってそういう場所って苦手っぽい。彌季ちゃんはなんとなく似合いそうだけど。

って、トキに悪いかな。

なんだか楽しい。自然と笑みが浮かぶ。

楽しいな……。

友達がいるっていいな……。

オレはベッドに寝ころんでマンガを読んでいる。

もちろん前の続きだ。

なんと読んでもワクワクする。

なんというか、こう……血が騒ぐって感じ？

いいよねえ～。

既刊を最後まで読んだら、また最初から読もうっと。

……………。

……………。

……………。

と、しばらく読んでいたわけだけど……。

「あーっ！ もーっ！」

なんだか……な。

イライラとしてきた。

別にこの話がどうのってわけじゃなくて……。

なんだかこれを読んでもあの時の事を思い出してしまうっていうか……。

一緒に三年前の事も思い出してしまう。

全部あのMLTのせいだ！

MLTで三年前の事をもう一度見てしまったから……。見せられたから……。

あの時の事は忘れようって……そう思ったのに。

いや、もちろん朱音（あかね）の事は忘れるはずないんだけど。

でも、あの忌まわしい記憶だけはなんとかしたかった。

そう……あれを知るまでは責任を全部あいつに転嫁してたから……って、オレってば結構難しい言葉使うね……。責任転嫁なんて、普段使わないよね……。せめて、あいつのせい。ってところで終わりだもんな……。

おっと、そんな事はどうでもいいんだ。

オレはなにも当時の事を知らなかったし、それ以前に会った事もなかったから顔も知らなかった。

朱音に写真を見せられた事もあったような気もしなくはないが、別段興味はなかったし、そう思っていないと、もし顔を知ってしまったらそいつになにをするかわからなかったからな……。

朱音をオレから取り上げるなっ！

って。

でも、朱音の幸せそうな顔を見ていたらそんな事できるはずもなかったけど。

オレにとって、朱音の笑顔が一番大切だったからな……。

だから、あの時も朱音に協力したんだ。

朱音が喜んでくれる。

朱音が笑ってくれる。

朱音が幸せな時間を過ごしてくれる。

それだけでよかった。

結果、ああいう事になってしまったわけだが、それは全部あの男が悪いんだと思っていた。

ずっとそいつを恨んでいた。

憎んでいた。

赦せないでいた。

もう、殺してやりたいくらいに。

死んで朱音の側に逝って朱音を笑顔にしてやれ、くらいには思った。

でも……それは朱音が悲しむだろうから。

もちろん、実行できるはずもなかったわけだけど。

だから、オレはその男の存在を自分の中から消してしまうつもりだった。

つうか、ほとんど削除した。

でも……あのMLTで会ってしまった。

まあ、向こうはオレたちの事を思えてるはずないんだけどな。

それにしても……あいつもかなり後悔していたみたいだな……。

当時からずっと朱音の事だけを好きでいてくれたみたいだし、朱音を大切にしていたみたいだ

。

もし浮気とかしていたり、考えたような素振りがあったら絶対に赦していないけど。……まったく、オレの恋人ってわけでもないのにな。

誰であろうと、朱音を傷付けるヤツは赦さないけどな。

でも……。

まあ、あれはあいつにはどうしようもできなかつた事だしな。

不可抗力といえば不可抗力だ。

……って、またまたオレってちょっと難しい言葉使ってるんじゃない？ 少しは賢く思われるかな……。

とまあ、それはどうでもよくないけど、どうでもいい。

でも、オレなら護れたんじゃないかも……って、思うだけだよな……。あんな状況でどうしろっていうんだよ。

それに……あんなに朱音を大切に想っていてくれて……オレは正直嬉しかった。

朱音も幸せだったんだし、それでよかったのかもな……。

できるなら、もっと朱音の笑顔を見ていたかったけど。

ずっと一緒にいるものだと思っていたからな……。っていうか、信じてた。大人になって、仕事をして、結婚して（オレはそんな気はないけど）、子どもができて（オレは別に子どもはいらないけど）、年老いても……ずっと……ずっと……。

それが夢に終わってしまったんだよな……。

だからといって、あのMLTがイヤになったわけでもない。いい思い出もできた。オレはあそこで友達ができた。

大切な友達だ。

なんか、変な因果（おっ、また難しい単語）なのかもしれないけど、オレはずっとその友達を大切にしていきたいと思う。

そう思ってる。

そりゃ……あの事を知った時はどうなるかと思ったけどさ。

だって、その友達の一人——彌季の親父が朱音を殺したんだからな。

まあ、あとで操られていたってわかったんだけど、やっぱりな……。

どこかで恨んでるのかね……。

でも、赦そうって決めたんだ。

だって、彌季は悪くない。

彌季も傷を負ったんだ、心に。

もう一人の友達の夏菜（なつな）もそうだった。夏菜も心に傷を負っていて、それでも彌季を赦すと言った。オレにはすごいとしか思えなかった。

そうなんだよな。彌季を恨んでもしょうがないわけだし、朱音が戻ってくるはずもない。

『あなたは本当にカノジョを赦せたの？ そう思いこもうとしているだけじゃないの？』

「誰だ！」

部屋を見回す。

でも、誰もいない。

……なんだ？

確かに声はした。

でも、姿はない。

ゆ、ユーレイ？

いや、そんなはずはない。

そんなものがあるはずない。

こんな科学的な時代にユーレイなんて……。

いや、でも……。

ちょっと待って。

そんな科学的な時代に非科学的な事に巻き込まれたオレは……？

死神とかいうヤツにも会ったし、オレも超能力を使ったわけだし……。

おいおい。

じゃあ、もしかしてさっきのは……マジでユーレイだったりするのか？

……ちょっと待て。

落ち着け。

違ったら違う。

落ち着こう。

ほら、忘れよう。

そうだ、マンガを読もう！

マンガを読んで忘れようっと。

それがいいと思う。

せっかくの残り少ない休日なんだし、ウジウジ考えててもしょうがない。

オレは決めたんだ。楽しく生きようって。

友達もできたんだから。

そう、朱音の分も楽しまないとな。

わたしは輝けたのかな……？

『そうね、あなたは輝けていないわね』

えっ？

突然の声。

「誰？」

キョロキョロ。

……………誰もいない。

「誰よ！」

わたしの声が虚しく響く。

誰もいない場所。

誰もいない学園。

誰もいない時間。

わたしだけがそこにいる。

「誰よ！ 出てきなさいよ！」

……誰もいない。

だからかな、強気になれる。

わたしは勇気がない。

強く構える事もできない。

弱い。

でも、素敵な友達ができる。

楓（かえで）夏菜さん。

星霜（せいそう）鴉絵（ときえ）さん。あ、トキさんだった。

こんなわたしにできた友達。

大切にしたい友達。

絶対手放したくない友達。

失うわけにはいかない友達。

弱さを見せられる友達。

わたしは色々なものを求めている。

こんなに非道いわたしなのに。

赦されるはずのないわたしなのに。

それなのに求めてしまう。

わたしが傷付けたのに、わたしを赦してくれると言ってくれた友達。

わたしの宝物。

それでも、わたしは受け入れられない。
だって……わたしが友達の大切なものを裏切ってしまったようなものだから。
大好きな友達のお父さんをわたしのパパが奪った。
大好きな友達の親友をわたしのパパが奪った。
わたし自身の人生をわたしのパパが狂わせた。
それを過去の映像としてだけど、その瞬間を見てしまった。
今までは世間で犯人とされていただけで、確信は誰もなかった。

「最重要容疑者、

そんな感じの言葉なのかな。
そう言われているのだから、きっとそうなんだろうと思っていた。
真相は闇に葬られてしまっていたから。
パパが死んでしまったから。
心の何処かで信じたくない気持ちがあった。
間違いなくわたしのパパだった。
正直ショックだった。
これでもう覆されない事実になってしまった。
パパが人を殺した。
絶対にパパを赦せない。……と、思う。
でも、パパは操られただけらしい。
それが救いなのかな？
それを救いにしているのかな？
それで救われるのかな？
本当は救いなんてないのに、それでも救いを求めてしまう。
それが、わたしの輝きなのかな？
わからないよ……。
たとえそうでも、それがわかるのはほんの一部だけ。
もっと言えば、わたしたちだけ。
他の人に言ってもわかってもらえないだろうし、わかるはずもない。
結局、パパは人殺しで、わたしは人殺しの娘なんだ。
それでいいよ、もう。
世間がわたしを排除しても、わたしには友達がいる。
そうだよ。友達がいればなにもいらぬじゃない。
わたしに必要なのは友達だけ。

誰もいない校舎を歩く。

気が付いたらここにいた。

どこか自分の家以外の場所に行きたかっただけ。

自然にここに来ていた。

やっぱり、今のわたしが一番いるのがここだからかな。

カソリック系の学園らしく教会が学園の敷地内にある。きちんと懺悔室まである。

神様.....わたしは赦されるのでしょうか？

シスターも誰もいないその部屋で何度も懺悔した。

繰り返し繰り返し赦しを乞うた。

赦されたのかな.....。

でも、わたしにはわからない。

どちらかというとなじられないのかも。

それでもわたしは通いつけている。

だから、今日もここに来てしまった。

「神様.....」

十字架の前に跪き手を組み合わせる。

「神様.....」

目を閉じて何度も口にする。

敬虔な信者でもないのにな.....。

だからかな.....手を差し伸べてくれない。

でも、聞いた事がある。

神様が出来る事には限りがある。

ゝ生命を生み出す事、

ゝ生命を見守る事、

ゝ生命を消し去る事、

この三つだと聞いた事がある。

だから人々の赦しを聞き届けてはくれないだろうけど。

それでも、心休まるのは事実だ。

気休めでも、まやかしでも、気のせいだって構わない。赦しが欲しい。

自分勝手だというのはわかっているけど.....それでも赦しが欲しい。

ワガママですか？

贅沢ですか？

欲張りですか？

それでも何度も祈ります。

本当に赦される事はないとわかっていても……何度でも。

しばらくの間祈り、目を開ける。

十字架が輝いているように感じる。

お赦しを。

教会を出ると外の光が眩しい。思わず手で目を覆う。

まるで `輝きの園、みたいだ。

……なんて笑っちゃうな。

スッキリとした気分で陽の光の下を歩いていこう。

ここはどこだろう……？

真っ暗でなにも見えない。

「ねえ……………」

どこかに向かって、誰かに向かって、希望を託して呼んでみるが声は木霊するだけ。返事なんかない。

真っ暗でちょっと先もわからない。

目は開いているんだろうか？ ……ちょっと、それも正直わからない。

手を伸ばしてあちこちを探りながら一步一步ゆっくりと進んでいく。

……ホントにどこよ！

……………落ち着け。落ち着けあたし。

ちょっと思い返してみよう。

今日、あたしはMLTに行った。

友達っていいなって思った。

えっと……その前に確か……………そうだ、変な声を聞いた……ような気がする。

それで、適当にブラブラと散歩して家に帰って、夕御飯を食べて……。ああ、あのクリームシチューは美味しかったな……お代わりしちゃった。

そうじゃなくて……………そういえば、なにかのラジオでパーソナリティがクリームシチュー丼って美味しいよね、とか言ってたな……。あ、試せばよかったじゃない。

ちょっと気持ち悪そうな気もするけど、美味しそうでもあるんだよね……。

でもさ、ビーフシチューをご飯にかけるとハヤシライスっぽくない？

赤がいけるんなら白も大丈夫なんじゃない？ クリーミーな感じがいいかも。

なんとなく聞いたら変かもしれないけど、案外いけるかも。

よし、今度は絶対に試すぞ！ ちゃんと覚えておかなくっちゃ。

……………って、なに現実逃避してるの？ えっと……なにしてたっけ？

頭を抱えてウンウン唸る。

MLTに行って、帰ってきて、ご飯食べて……そうだ、そこまでだ。

ご飯食べて、ぼんやりと面白くないバラエティを見たんだっけ。進行悪いよね……なにが面白いのかよくわかんないけど、サクサク進めろよ、なんて思ったっけ。

まあ、暇つぶしで見ただけだし……でも、そんな番組のせいでせっかくの暇つぶしでイライラした気分になっちゃって……ああ～最悪。

……………と、話がまたそれた。

くだらないバラエティを見たあとにお風呂に入って……。

そうだ。鼻歌でも……って、ふんふんふ～ん、なんて御機嫌。

なにが御機嫌って、桜の香りの入浴剤が入っていたから。

いやあ……和むね。

日本人には桜だよ。

ほえほえだよ。

ハッピーだよ。

くだらないバラエティなんてすっかり忘れちゃったよ。どうでもいい記憶はポイ。さっさと忘れちゃお。

それで、超御機嫌になって……お風呂から出て、バスローブを羽織って化石を見ながらブランデーをくゆらせて——なんて事をするでなく……だいたい未成年だよ、あたし。するわけないじゃん。それに、化石を着にブランデーって……。否定はしないけどさ。やっぱりそういうのは食べ物の方がよくない？ それ以前に化石なんて持ってないって。なんだか絵を見ながらそれをおかずにご飯を食べてるようなものじゃない？ まあ、趣味趣向は人それぞれですけどね。でも、ちょっとそういう生活も素敵かも。なんだかエレガントって感じしない？

えっと……また違う話になっちゃった。

とにかくお風呂から出て、お気に入りのピンクのパジャマを着て、そのままベッドイン！

……………それで、悶々と……はしてないけど、なんだか眠れなくて……。

あの時の事を思い返していたんだっけ。

えっと……変なメールを受け取って、MLTに行って、自分と同じ輝きの使者だという彌季ちゃんとトキに出会って、ついでに死神と噂されているメビウスにも出会って、さらについでにそのメビウスの仲間だとかいう白いヤツ（名前は忘れた）にも出会って、久しぶりに威仁君にも会って……はないか……ないよね？ 多分……だって、ほら、オプスキュリテとかいうヤツだったみたいだし……。それはどうでもいいけど。

それで結局……あたしたちは無力だったんだよね……。

なにもできなかった。

誰も救えなかったんだ。

あたしたちがした事は他人の過去を覗いただけ。

そして、当時の様子を知った事だけ。

そう、知ってしまった。真実を。

だけど、知ったからといってあたしたちにはなにもできない。

だって、裏の世界の住人？

闇がどうのこうの？

そんなのわかるわけじゃない。

超常現象そのものだったもん。

あたしたちはなにもできないただの女子高生だ。

地球を救う戦士でもなんでもない。

普通に学校に通って、普通に友達と遊んで、普通に恋……はこれからする予定。

とにかく普通なんだから。

エスパーでもなんでも……あるのか。

そうなんだよね。

あたしは輝きの使者なんだよね。

でも、だからってなにができるわけじゃない。

人々の心を輝かせる？

結局無理だったじゃない。

それに、あたし一人じゃなにもできないし。

結局半人前の能力者なのかな.....。

ん？

でも、あたしたちは三人で一つの事をしているんだよね。

というか、三人いないとできないんだよね.....。

それって、三分の一人前って事？

なんだかそれはそれでショック！

でも、現実的にはそんなものかもね。

あたし一人じゃなにもできない。

.....まあ、あのMLTの時は三人がかりでなにもできてないわけだけど。

それはおいといて。

えっと.....なにしてたっけ？

.....そうだ。どうしてこうなったのか思い返していたんだった。

とまあ、ベッドにインしたけどなかなか寝付けなくて.....それでも結局いつの間にか寝てしまったわけよね。

それで気が付いたらここにいて.....。

という事は、これは夢？

そうだよ、夢に決まってる。そうに違いない。

夢だ夢。

夢の中で夢だとわかるって、なんだかすごい気がする。

カラーの夢を見ると空を飛ぶ夢を見る事ができるとかなんとか.....違ったっけ？ まあ、いいけど。

そもそも真っ暗だしね.....。カラーかモノクロかなんてわかりっこないけど。

ああ、空を飛ぶ夢か.....。

憧れるよね.....。

夢占い.....だったかな、夢判断だったかな.....どっちでもいいか。空を飛ぶ夢は悪いとかなんとか.....学園の友達がそんな事を言っていたような気がする。

それでも空を飛ぶ夢は見たいな.....。

って、そんな事よりこの状況だよね。

真っ暗だね.....相変わらず。

一点の光もない。

光.....？

涙隠した瞳？

.....光.....光.....そうだ、あたしは輝きの使者のユニオじゃない。ユニオの能力は輝かせる事.....でも、発光とはちょっと違うのかな.....？

よくわからないけど.....。

あたしは目を閉じて念じる。呪文なんかはなくて念じるだけだ。

地味だね.....。でも、しょうがない。

輝け.....輝け.....輝け.....。

ぼわっ——

と、なんだか明るくなったような気がする。

ぼんやりとだけど、あたしの周りだけ光ってる。

「よし、成功！」

と、手を叩いて喜んだ瞬間、また真っ暗になってしまった。

「……失敗……？」

もう一度念じる。

輝く。

喜ぶ。

暗闇。

念じる。

輝く。

……どうやら気を弛めるとダメなようだ。ずっと念じていなくちゃいけないんだ……それはなんだか疲れるな……。

でもしょうがない。

でも、よく考えたら変だよな……。真っ暗な中、身体が輝いている人がそこにいる……客観的に見ると怖い。あたしなら全速力で逃げるね。

とまあ、今自分は自分が見ても逃げるような状況なわけか……。

我慢するしかないか。

とりあえず出口がないか進んでいく。同じ所にいてもしょうがないもんね。

サクサクと進んでいく。

進んでいるのかさえわからないってきついね……。まあ、同じ所をぐるぐる回っている可能性がないわけじゃない。進んではいるつもりなんだけどな……。

よしっ！ ジグザグに歩いてみよう。これで同じ所を……という可能性が低くなるに違いない。

……うわ……なんだか余計に疲れるような気がする。いや、気分的に疲れる。

やっぱり真っ直ぐ進もう。

それにしても、全然景色が変わらない。まあ、元々景色がないんだけど。

最初はビクビク一歩を踏み出していたのに、今じゃなんとなくで歩いてる。慣れって怖いね。

目隠しをされた人が両側が切り立った崖の一本道を歩かされました。その人は無事に歩ききりました。どういうわけでしょう。

……なんてのが昔、クイズであったよね？

なんとなく思い出しちゃった。

もちろん、ずるをしたわけじゃないんだよ。目隠しを取ったりしてないし、目隠しが薄くて透

けていたわけでもない。本当に完全に見えない状態で一本道を歩いていた。

その一本道も一センチとかじゃなく百メートルはあろうかという距離。

崖も二十メートルくらいはあると仮定。

道幅は二メートルくらいとしておこうかな。

そんな状況で.....って、そんな事考えて現実逃避してる場合じゃないよね。

あたしどうなるのかな.....。

こんな暗闇を歩き続けるの？

っていうか、こうやって輝かせ続けるのって案外疲れるんだけど.....。

あー！ もー！ 維持できない。

ちょっとくらい消えても大丈夫かな.....。

でも、こんな自分の周りだけの光でも消えたら不安だな.....。

こんな所で死にたくないよ.....。

まだしたい事がいっぱいあるし。

せっかく友達もできたのに.....。

それに、番人だってしてみたかったな.....。

でも、疲れるし.....ちょっとだけ消してみよう。

.....真っ暗だ。

でも、ちょっと前までこういう状況だったわけだし、なんとかなるかも。

ゆっくりと歩いていこう。

それにしても、どのくらい歩いたんだろうな.....。

いい加減疲れてきた。

この辺で休もうかな.....。

「よいしょ」

.....あっ.....。

思わず言っちゃった。

あたしはまだまだ若いのに.....。

まだうら若き十代よ。

しかも、水も滴るいい女。

花の女子高生！

だって、あたしたちは花の高三トリオなのに.....。

ショックだ.....。

なんだか色々ショックだ.....。

でも、そんなに気にするような事じゃないよね。

誰だって言うに決まってるもん。

そうだよ。

.....っていうか、そういう事にしておいて。お願いだから。

とにかく一服一服。

それにしても、本当にどこだろうね、ここ。

っていうか、どんな夢見てるんだろう、あたし。

これで夢判断とかしたらどんな結果になるんだろう……。

とにかく悪い結果になりそうで怖いな……。絶対いい結果にはなりそうもないし。

——カツッ！ カツッ！

「えっ……？」

どっからかそんな音が聞こえた。

誰かが歩いてくるみたいなの……………。

って、誰かいるの？

それはそれで怖いんだけど……。

トキか彌季ちゃんならいいんだけどな……………。二人なら安心できる。

でも、違う人だったら？

なんだか怖い人だったら？

変態さんだったら？

幽霊さんだったら？

獣人さんだったら？ ……はありえないか。でも、夢の中だしな……。完全否定はできないよ

。

とにかく、怖い！

夜道の足音って怖いっていうけど、今まで体験した事なんてなかったからな……。こりゃ怖いわ。ホント。勘弁して。

——カツッ！ カツッ！

足音は近付いてくる。

確実にあたしの方に近付いてくる。

逃げよう……。うん。っていうか、律儀に待ってる必要なんてないじゃん。そうしよう。逃げちゃ……………って、足動かないし……。

ガクガク震えてるし……。

動いて。

動いてよ。

動け！

動け、あたしの足。

動けて、あたしの美脚！

ダメだよ……お。

自分の足じゃないみたい。全然全くちっともこれっぽっちもうんともすんともなんともかんと

も動かない。

どうしよう……………。

——カツッ！　カツッ！

その間にも足音は近付いてくる。

でも、姿は見えない。

そりゃそうか。一寸先は闇状態だもんね。

怖いよ……………。

ねえ、動いてくれないかな……あたしの足。

プリーズ・ムーブ・マイ・ビューティフォー・レッグ！

——カツッ！　カツッ！

音が大きくなってきた。

もう、すぐそこって感じだ。

でも、姿は見えない。気配も感じない。まあ、そんなに敏感じゃないけど。

音だけだなんて、余計に怖いよ……………。

——カツッ！

あ、止まった。

えっ。もしかしてすぐそこにいるの？

ちょっと……どうしよう……………。

向こうはあたしの事に気付いてるよね。でないと、こんな所で止まらないよね。

どうしよう……………。

あの……本気で怖いんですけど。

っていうか、夢なら早く覚めて！

こんな夢、見ていたくない！

覚めろ！

覚めろ！

覚めろ！

……ダメだ、覚めない。

と、急に周囲がポワッと明るくなった。

「……………っ！」

嘘……………。

冗談でしょ？

っていうか、冗談よね。

そこにいるのは……………。

信じられない光景だった。

ねえ、信じられる？

今、目の前にあたしがいるんだよ。

どういう事？

「あなたは……誰？」

変な感じがするけど……それしか思い浮かばなかった。

『あたしはあなたよ』

「……………」

『あたしは楓夏菜』

「嘘！ あたしが楓夏菜よ！」

目の前のあたしに向かって叫ぶ。

『そうかしら？ 輝いていない輝きの使者のくせになにを言ってるの？』

えっ……？

輝きの使者……。

どうして知ってるの？

いや、あたしなら当然か。

……って、あたしだって認めちゃってるよ、あたし。

ややこしいな……どうすればいいの？

『闇に覆われた輝きの使者なんていないの。だから、消えてね』

目の前の楓夏菜はニヤリと嫌な笑みを浮かべた。

あれ……？

オレはどうしてここにいるんだ？

真っ暗じゃないか。

オレはなにしてたっけ？

ちょっと回想……。

漫画読んで、晩飯食って、風呂に入って、そして寝たんだ。

以上、回想終了。

という事はこれは夢か。

そうか、夢か。

……というか、これはどういう夢なんだ？ よくわからない。

あ、夢ってそういうものか。

どうせ起きたら忘れてるし、どうでもいいや。

それにしても、真っ暗ってどうだか。

こんな夢見ても……なんだか夢見が悪いというか、寝起きが悪そうだな……。

というか、これって眠った感じがしないかも。

睡眠不足気味になりそう。

さて、いつ覚めるのかな……。

早く覚めて欲しいな……。

なんだかつまんない夢だな……。

いつも起きる時間まであとどのくらいかな……。二時間くらいかな……？

退屈だな……。

——カツッ！ カツッ！

なんだ？

足音か？

誰か来る。

……どこから来る？

思わず身構える。

どこだ？

どこから来る？

……というか、誰だ？

共鳴しているのか響いていてどこからかわからない。

耳を澄まして身構える。

「誰だ！」

しかし反応はない。

「誰だ！ 出て来い！」

遠くに向かって叫ぶ。

だけどなんの反応もない。

なんだよ、不気味じゃねえかよ。

ちょっと……その……なんだ……怖いじゃないか。

——カツッ！ カツッ！

相変わらず足音は聞こえる。それも近付いてきている。

おいおい、勘弁してくれよ。

真っ暗でよくわからないけど、すぐ傍にいる事はわかる。気配とかそういうものなのかはわからないけど。

とにかく……怖いんですけど。

「姿を見せろ！」

怖さを紛らわせるために叫ぶ。そうでもしないと怖いんだって。

オレだって女の子だし。

強がってるけど、女の子なんだよ？

『おいおい、強がってるのがバレバレだぜ』

すぐ近くで声がする。

しかも……なんだか知ってる声だ。しかも、よおく。

一番知ってる声——

——って、オレの声！

一瞬で鳥肌サバイボがぞわーって！ サブサブ（※注・サバイボと同じ）全開！

「どこだ！」

なんだか空間全体から響くように聞こえたのでどこにいるかはわからない。まあ、正面じゃない……と思う。これで正面だったら怖い。

『そんなに怯えて……オレらしくない。まったく、輝きの使者だったのに、なんて様なんだろうね』

なんだ、その言い方は！ 輝きの使者がどうのって関係ないだろう。怖いものは怖いんだよ。ん？ ちょっと待てよ。輝きの使者だった？ 輝きの使者の事を知っている？ ……………って、オレなんだから知ってて当然か。……………いやいや、そもそもオレはここにいる。だったら、この声のオレは……………怖っ！

「出てこいよ！」

周囲に向かって叫ぶ。

まったく、どこにいるんだ？

『おいおい、なんとも情けねえな。しっかりしろよな』

簡単に言うねえ。オレだったらわかるだろうに。

……いやいや、オレのはずがない。

だって、オレはここにいる。

オレの真似をしているヤツ……つう事だよな。

「出てこいよ、ニセモノ！」

本当にオレが出てきたらマジで怖いな。挑発しちゃマズかったかな？ 後悔先に立たず？

ええい、なるようになるさ。

「出てこいよ。姿を見せないのは卑怯じゃないのか？」

『おいおい、そりゃごもつともだけどさ。人の心の中を覗き見するのは卑怯を乗り越えて、反則の域なんじゃないのか？』

ぐっ……。ごもつとも。

確かにアレはどうかとも思うが……。仕方ないだろ、そういうものなんだから。

「んなの、どうだっていいだろ」

『仕方ないな……』

言葉通り仕方なくという風にそいつは姿を現した。

「……………」

うそっ！ マジっ？

そいつは、あまりに想像通りで驚いた。怖かった。

そいつは、オレの姿をしていた。

夢だからありなのか？

……………つうか、冗談抜きで怖い！

『おいおい、そんなに驚く事か？』

驚く事だって。

普通に考えて、いきなり目の前に自分が現れて驚かないヤツがいるか？ いや、いない。これって反語？ ちょっと賢く見える？

いやいや、そんな事はどうでもいい。

驚くだろ。怖いだろ。

「で、お前は誰だよ」

『なに言ってるんだ？ オレは星霜鴉絵だよ』

「なっ……………」

本名を臆面もなく言うとは……。

なんとなく恥ずかしいからトキって名乗ってるってのに！

……………ちょっと待て。

そんな事を言えるって事は、こいつはオレじゃない？

そういう事じゃないか？

「お前は誰だ」

『理解力ないのか？ 言っただろ、オレは……………』

「オレだってんだろ？ けどな、オレはその名を名乗らない！」

『……………さすがね、コネクター』

声色が変わった。オレの声じゃない。

姿はオレのままなのに、声が違う……つうか、女の子っぽい可愛い声ってのは気持ち悪いんだけどな……。

『そこそこ輝いてるみたいだし』

なんの事だ？

けど、こいつはオレが輝きの使者だって知ってる。オレの能力も知ってる。

怖い。

知られているのに、相手の事はなにも知らない。

怖い。

手の内は全部知られている。相手は存在すらわからない。

怖い。

どうすればいい？ どうすればいい？

『面白くないの』

そう言った瞬間、そいつの姿が変わった。

髪の長いお嬢様然とした姿。

どっかで見た事あるような……。思い出せないけど、まあいい。

「……………」

『あなたは整理をつけているのね』

なんの事だ？

『相手を赦している。自分の罪を認めている。輝けている……』

だから、なんの事だ？

『あなたに付き合うだけ無駄のようね』

だからなんの事なんだって。

と、それには答える事なく、そいつは消えた。

真っ暗闇。

ここはどこなのでしょう？

それ以前に、わたしはどうしてこんな場所に？

夢……なののでしょうか。

少なくとも失明したわけではないようです。

失明すると暗闇ではなく、真っ白な濃霧の中にいるようだと聞きますし、なによりわたしの身体は見えています。

周囲だけが見えないのですから、ここは暗闇だと思って間違いないでしょう。

それにしても皮肉でしょうか。わたしは少し前に輝きの使者として人々を輝かせようとしてきました。そんなわたしが暗闇の中にいるなんて……面白い話です。

「誰かいませんかー？」

とにかく誰かに助けを求めるのが一番だと思います。わたしだけの力ではどうしようもないですから。誰かの力を借りる事を悪い事だとは思いません。人は一人でできる事に限界があります。誰かと一緒に行動する事で何倍の事でもできるのですから。

返事はありません。

「誰かいませんかー？」

もう一度呼びかけます。

正直に言って、この状況は淋しい。

誰か側にいて欲しい。

そう……友達の夏菜さんかトキさん。できれば二人とも傍にいて欲しい。今のわたしには二人だけが傍にいてくれればそれでいい。

心細い。

一人は嫌。

もう、一人になりたくない。

傍にいて欲しい人がいるから。

——カツッ！ カツッ！

……………？ えっ？ 足音？

足音という事は、誰かいるんですか？

……………誰？

「夏菜さん」

傍にいて欲しい人の名前を呼ぶ。

……………返答はない。

「トキさん」

傍にいて欲しいもう一人の名前も呼ぶ。

…………でも、やっぱり返答はない。

——カツッ！　カツッ！

誰かがいる。

でも…………誰？

夏菜さんでもない。

トキさんでもない。

じゃあ……誰でしょうか。

「どなたですか？」

その音に向かって呼びかけます。

……………。

でも、なんの返答もありません。

途端、怖くなってきます。

正体不明の足音。

一寸先も見えない暗闇。

聴覚、視覚……なにも手掛かりのないこの状況は、不安と恐怖以外のなにものでもありません

。

怖い。

腰が抜けてしまったのか、ぺたんと尻餅をついてしまいます。

「ど、どなたですか？」

自分でも声が震えているのがわかります。

せめて返事をしてくれれば…………でも、それはそれで怖いです。

——カツッ！　カツッ！

近くで足音が止まります。誰かがいる気配はします。でも、姿はよく見えません。なんとなく女の子のような気が……します。

『はじめまして、でしょうか』

やっぱり女の子のようです。なんだか……聞いた事のある声。

「……………」

ゆっくりとその子が顔を近づけて…………えっ？

言葉が出ません。

信じられません。

嘘……ですよね。

だって…………そこには、わたしがいました。

あなたは.....と言いたいんですけど、声が出ません。心臓が破裂しそうに鼓動しているのがハッキリとわかります。

『そんなに怖がらなくてもいいと思うんですけど』

丁寧な口調ですけど、やっぱり怖いです。

『輝きの使者もその程度ですよね』

…………っ！

輝きの使者。

その言葉は……。

「どうしてそれを？」

『なにを言ってるんですか？ わたしは呉羽彌季なんですよ。知っていて当然じゃないですか』

…………そ、んな…………。

「待って下さい…………くれ…………」

『呉羽彌季はわたしです、とか言わないで下さいね。輝きを失った輝きの使者なんてニセモノだ
と思うんですけど』

…………輝きを失った…………。そうかもしれません。

あの時——MLTの時もわたしはなにもできませんでした。

結局、過去の傷を抉っただけでした。もう一度、傷付けてしまったようなものです。

だとしたら、やっぱりわたしは…………輝きの使者失格ですよ。

『あらあら、どうしました？ 落ち込んでいるのですか？』

その通りです。

ニセモノ…………。そのレットルはわたしには相応しいのかもしれませんが。

ニセモノニセモノニセモノニセモノニセモノニセモノニセモノニセモノニセモノニセモノニセモノニセモノニセモノニセモノニセモノ…………。

グルグルと駆け巡る言葉。

ヒトゴロシのムスメ。

それが本当のわたし。

そう……わたしには友達なんて……仲間なんて……いちゃいけないんですよ。

『あらあら、輝いていない輝きの使者なんて不要なの。消えて頂戴』

……本当です。

本当にその通りです。

わたしは輝いていない。

でも——

ゝあたしは赦すよ。あたしはセパレイターを赦す、

夏菜さんが言ってくれた言葉を思い出す。

その言葉でわたしは救われた。輝けたと思った。

夏菜さんこそ輝きの使者だ……。でも、おこがましいかもしれないし、傲慢かもしれないけど、わたしも夏菜さんと同じ輝きの使者なんだから…………輝ける！

「わたしはわたしでしかない。わたしは輝きの使者のセパレイター。だから、あなたはわたしじ

やない！ あなたは誰！」

不思議と力がわいてきた。

もう怖くない。

姿は見えなくても、友達は近くにいる。

夏菜さんもトキさんも傍にいる。

二人を感じていられる。

だから……。

だから、わたしは輝きの使者でいられる。

輝きの使者のセパレイターでいられる。

『言ったはずですよ。わたしは呉羽彌季。輝きの使者のセパレイター』

「違う！」

わたしの声がこの空間に響く。

「あなたは誰ですか！ わたしはわたしです。……もう、自分を見失わない。輝いていないかもしれないし、誰かの力を借りないと輝けない半人前なのかもしれない。……でも、それでもわたしはわたし。呉羽彌季です！」

言い切った。

自分でも驚くほど……。

そう、わたしはわたし。

目の前のわたしの姿をしたもう一人わたしはわたしじゃない。

『やれやれ、そんなに言い切れちゃうとはね……正直、驚きね』

くにやりと目の前のわたしの姿が歪む。

『このシュピーゲル様を看破するなんて。あなたは自分なりの輝きの園を見つけたのかしらね』

えっ……………？

『なら、そんなあなたには興味はないの。じゃあね』

そう言うと、わたしの姿をした――シュピーゲルは消えた。

三雲政孝はMLTを見上げていた。

あの時――最上階に到着した時、全てが終わったとあいつは言っていた。

だが……とも思う。

彼の中のなにかが、まだだ、と言っている。そんな気がする。

根拠はない。

確証はない。

証拠もない。

それでも、そう思えて仕方ない。

「しかし……な。こうもなにもないとはな……」

先日の事件の詳細は一切わかっていない。

その解明を困難にさせているのが、なんの形跡もない、という事だった。

実際にMLTにいた人たちは一通りの事情聴取をされたのだが、その答えは全て同じだった。

よくわからない。気が付いたら眠っていた、

というものだった。

その事から催眠ガスなどが疑われたが、そういったものは検出されていない。

MLTに対するテロ行為という噂だけがまことしやかに一人歩きしている。

もちろん、三雲がそれを信用するはずがない。

なぜなら三雲は誰も知らない事を知っているのだから。

メビウスが関わっているという事実。

それが全てのような気がする。

だとすれば、警察に解明できるはずがない。

事件の直後だけだったが、ニュース番組では、識者が『これはテロ行為だ』とか『愉快犯の悪戯でしょう。煽ると犯人を喜ばせるだけです』や『集団催眠でしょうね』などと語っている。

馬鹿馬鹿しい。

三雲はそうとしか思えない。

しかし、自分が知っている事の方がよほど夢物語だ。

死神と噂されているメビウスというヤツが……なんて、おそらく精神を疑われてしまうだろう

。

だが、メビウスが起こしたと考えているわけではない。関わっただけだろう。

事前に察知していたのか、それとも偶然か。それはわからない。

自分もこうして関わってしまっているというのは、これも運命なんだろうな……。

「ちくしょう！　ここまでしていながらなにもできないとはな！」

三雲は地団駄を踏む。

「光月圭一郎……。まったく、色々と謎な男だ。だいたい、死んだってのも怪しく思えてきちまうじゃないか」

そうもう一つ巷では、これは光月圭一郎の呪いなのでは、とも囁かれている。

M L Tで殺された光月が起こした呪い。それに便乗して名を売ろうとする霊能力者がいるとかいないとか。

「だが……呪いってのもあながち嘘じゃないかもしれないな。こうなると、なんとしても調べてやる」

三雲はM L Tをあとにした。これ以上ここにも収穫はないと判断した。中に入る事ができれば別だろうが、警察がいるため無理だ。

あの隠し通路……。あそこになにかある。

三雲はそう考えていた。

星霜トキはMLTを目指して走っていた。

(あいつは輝きの使者がどうか言っていた。だとすれば、あの時あそこにいたんじゃないか?)

というのがトキが出した答えだった。

トキはそうと決めたらまっしぐら。

(それに、きっと夏菜と彌季のところに.....って、そういや、二人に訊く方が早かったんじゃないか?)

と、その事に気付いても時既に遅し。

(オレのここだけのはずないもんな.....)

そう考えて、ポケットを探る。もちろん携帯電話を探しているのだ。.....が、
「ない」

立ち止まってポケットを探す。

しまいにはポケットだけでなく、服をパタパタさせてみるが、どこにもそれはない。

(.....もしかして.....また、やっちゃった?)

そう、彼女の携帯は彼女の部屋に忘れられていた。

その携帯は、まさに今着信を告げている。

わたしは臆気に天井を見上げた。

あれは夢だったのかしら。

でも、それにしては生々しかった。

なにせ、自分と向き合うなんて夢……夢占いではどうなるのでしょうか？

疑問には思いますが、あいにくと詳しくないのでわかりません。

それにしてもMLTに関する事を夢に見るなんて……。

あの出来事はもちろん忘れられない。

だから夢に見たのかな……。

そんなに気になるほど……だよな。

どうしても、わたしはパパの呪縛から逃れる事はできない。

でも、夢の中でも言ったけど、わたしはその事実を受け止めていく。その事実もわたしの一部分のだから。それを否定する事は、わたし自身を否定してしまう事だから。

だから、わたしはこのままでいいと思う。

それが輝いているという事なの？

あのシュピーゲルと名乗ったわたしの姿をした存在。

彼女はなんだったんだろう？

わたしは輝いていないと言った。

でも、その後に輝いていると認めてくれた。

彼女の言葉に従うなら、わたしは「輝きの園」へ行ったという事になるのだろう。

輝いていなかった輝きの使者だったからこそ、あの時は失敗した……そう考えていいのかな？

でも、だからといってもう一度しろと言われても、わたしは拒否する。

あんな事……。

誰かの心の中に入り込む……。その行為は人の心に土足で踏み込むようでどうも心地よくない

勝手に見るようでイヤだ。

でも、わたしは彼の心を輝かせてあげられなかった事に関しては悔やんでいるんだと思う。

宮架（みやか）君……。

彼に恋人がいたというのは少しショックだったけど、彼は素敵な人だから当然だよな。

そんな彼の心を輝かせてあげられないまま。

宮架君の彼女の親友がトキさんだと知った時は驚いた。

だって、あの事件の関係者に直接会うなんて事はなかったから。

会いたくないというのが本心なのかもしれない。

だって、会ってしまえば絶対に責められる。

当然だとは思っているけど、それでも怖い。

できれば赦して欲しいと思ってしまう。

わたしは聖人じゃないんだもの。

神様でもない。

ただの女の子。

そんなに強くない。

だから、嫌な事からは逃げたいとも思う。

弱いから。

傷付けられたくない。

殺人犯の娘だとしても……。

……そんなわたしだったけど、初めて赦された。

トキさんはわたしを赦すと言ってくれた。大切な親友を失ったのに。それなのに言ってくれた

。

そして、夏菜さんも赦すと言ってくれた。自分のお父さんを失ったのに。家族が欠けてしまったのに。それなのに……言ってくれた。

それが慰めや、その場だけの言葉じゃないという事はわたしにはわかる。

二人は本当に赦してくれたんだと思う。

パパの行為を正当化しようとも思わないけど、仕方のなかった事なんだと思う。

その真相はわからないままだったけど、その時の様子をこの目で見た。

確かにパパだった。

娘の鼻真目だろうか、あの時のパパは普通じゃなかったと思う。まるで、なにかに……誰かに操られているみたいだった。催眠術で……なんて突拍子もない事だとは思うけど、そんな感じがする。

でも、だからといって赦されるわけじゃないんだらうけど。

嬉しかった。

すごく嬉しかった。

そんなわたしを赦すって……………。

あ、涙が……止まらないや。

十字架が少しでも軽くなった……と思いたい。

もちろん、なくなりはしない十字架。永遠に背負い続ける十字架。

あんな夢を見たせいで、朝からこんな事を考えてるなんて……。なんだか暗い朝になってますね。

それにしても、やっぱり気になります。

あの夢は、わたしだけだったのかな……？

もしかしたら、トキさんや夏菜さんも……。

その可能性はありますね……。

あのシュピーゲルと名乗ったわたしは、まるであの時の死神のようでしたし……。

ただの夢とは思えないかもしれません。

だとすれば、きっと二人も見ているはず。

わたしは携帯電話をとり、まずは夏菜さんに電話を掛けます。

——プルルルル♪ プルルルル♪ ……………♪

五回、十回……コール音が鳴るだけで、出る様子はありません。

「どうしたんでしょう……」

まだ眠っていて気付いていないだけかも、と思って時計を見ると、もう七時半です。普通は起きています。

でも春休みだから……もしかしたら眠っているのかもしれませんが。

でもでも、もう一度掛けます。

——プルルルル♪ プルルルル♪ ……………♪

同じです。

どういう事でしょうか？ ホントに眠っているのでしょうか。

仕方ありません。トキさんに掛けましょう。

これは個人的な印象なのですが、彼女は朝に弱そうな気がします。

ただ低血圧だとかそういう事ではなく、夜更かしのせいで朝に起きる事ができない……そう思います。

でも、もしかすると起きています。

その希望に望みを託して電話を掛けます。

——プルルルル♪ プルルルル♪ ……………♪

夏菜さんの時と同じだ……。

ただ眠っているだけだといいいんですけど……。

ープルルルル♪ プルルルル♪ ……………♪

そういえば、今までこんな事をする事なんてなかったな……。

誰かに電話を掛けるなんて……。

それが友達になんだから、なんだか贅沢なような気がする。

これも、今までの反動なのかな……。

その友達になって考えてみよう。

わたしなら、こういう時どうするのか……。

……………。

……………。

……………。

散々考えたけど答えは出ない。

どこだろう……？

二人なら何処に行く？

……………っ！

そうだ！

どうして浮かばなかったんでしょう。

MLT！

そこに行く。

わたしたち輝きの使者を繋ぐ場所がMLT。

だとしたら、MLTに行けばなにかわかるかもしれない。

そうだよ。わたしたちは絶対にそこに行くだろう。

行ってみる事にしましょう。

あまり気は進みませんが。

「ちっ」

と、三雲政孝は舌打ちせずにはいられなかった。

予想はしていたものの、いざとなるとやはりつらいものがある。

「とりあえず、他に手掛かりがないいじょう、やっぱりあそこしかないんだろうな……」

三雲はMLTに重い足取りで戻る事にした。

一時間前――

MLTをあとにした三雲が向かったのは、南にあるアビリティー・ムーン本社ビルだった。手掛かりがなにもない中、唯一と言っても過言でないのが、現代表取締役社長の高澤吉郎だった。

息子の高澤威仁はあの事件で行方不明になっている。

それがあってか、計画的な誘拐事件と取り上げるマスコミもあった。

もちろん彼だけなら大事にならなかったのかもしれないが、そこに前社長の光月圭一郎の娘もいなくなったとあれば、煽るように、まるでお祭りのように騒ぎたてる。

そう騒ぎたてて彼のコメントをとろうとした輩が後を絶たないせいだろうか……とも思ったが、そうでなくてもこれは当然なのだろう。

「社長の高澤氏に会いたいんですけど」

と、三雲は受付の女性に申し出た。

「お約束はされていますか？」

女性は淡々と返す。

「いいえ。ちょっとあの時の事を訊きたいと思ひまして……」

「申しわけありませんが」

「そこをなんとか……」

「申しわけありません。取材の類はお断りさせていただいています」

まあ、当然か。

だが、三雲はそれでも食い下がる。

「ほんのちょっとだけでいいんだ。別に取材なんかじゃない。記事にするような事はない。だから、お願いしますよ」

「申しわけありません。お約束のない方は……」

「そこをさ。ね。そうそう、社長に取り次いでくれればわかるから。顔を見れば……」

「申しわけありません」

受付の女性は、その言葉を繰り返すのみだ。

それはまるで、その言葉しか知らないかのよう。

彼女はといえば、その言葉を言い続けて、そろそろうんざりしてきていた。

あの事件以降、こうして約束もなしに面会を求めてくる者が後を絶たない。その都度その言葉

を言っている。その全員が、三雲のようになんとしてもしつこく迫ってくる。

これが、自分に迫ってきている男なら…………と、少しだけ自分もこうして言い寄られたいと思うが、しつこいのは勘弁とすぐに気を取り直す。

そんなこんなで、三十分ほどねばってみたものの、三雲が聞く事が出来た言葉は『申しわけありません』だけだった。

なにを言っても断り続けるとは……と、三雲は感心さえしていた。

「さて、ここまでねばっても無理か……。まあ、他にも大勢いたんだろうな……。さて、手掛かりはやっぱり…………あそこだな」

「トキさん……」

呉羽彌季がMLTに着くと、やはりそこには星霜トキの姿があった。

「もしかして、トキさんも……あの夢を？」

挨拶もそこそこに彌季は本題を切り出した。

「ああ。彌季もなのか？」

「はい」

「なるほど……って事は、アレは……」

「夢じゃないかもしれませんね」

「ところで夏菜は？」

「携帯に電話しましたが、出ませんでした。ちなみに、トキさんにもしたんですよ」

「そうなのか？ でも、鳴ってなかったし……って、今持ってなかったんだって」

「持っていない？」

「どうせ、家に忘れたんだろうけどな」

それを聞いた彌季は、大きなため息を吐いた。

ちょっと、どうなってるのよ。

あたしの姿をしたそいつは、突然あたしに襲いかかってきた。

なに？ なんなの？

とりあえず――

逃げる。

っていうか、逃げるしかないよね。

こんな所で死にたくないよ～。

こんな所じゃなくても死にたくないよ～。

もう、涙出てくるよ……。ちょちょぎれちゃうよ……。

まったく……マラソンって苦手なんだよね……。体育の授業なんか、どうやってサボろうかって絶対に考えちゃうもんね。でしょ？

それなのにこうして走ってるなんて……。

人間、やる時はやれるものなんだね……。

それにしても……本当に逃げれているのかな……？

ここ、真っ暗だし……。

進んでいるのかもわからない……。

何処に行けばいいのかもわからないし……。

ダメだ。そんな事考えたら疲れてきちゃった。

余計な事を考えちゃダメ！

はあ……………しんど。

こんなに必死で走ってなんになるわけ？

逃げ切れるわけでもないのに。

あたしは疲れて止まってしまう。

絶対に追いつかれる。

っていうか、その前にあれはなに？

いや……あたしの姿をしていたからあたしなんだろうけどさ……。でも、あたしはあたしなわけで、でもあれもあたしなわけで……。

よくわからん！

考えてもしょうがない。

そんな事に体力使うなら走ろう。

そうだ、なんか気を紛らわせるために歌でも……………。

……………。

……………。

.....○

なにも思い浮かばない。

余計に疲れた。

どうすりゃいいのよ！

さて、光月の事を調べるにしても、手掛かりがないわけで……。

光月が関与した場所はいくらでもある。だが、それは出資しただけだ。そんな場所に行ってもなにもあるはずがない。

かといって、本社はあれだしな……。

やっぱり手掛かりがあるとすればMLTくらいか。

MLTは光月圭一郎の私財で建設されたらしいからな……。だからこそ、あんな無用の長物が今でもああして存在するわけだが。

MLTへ戻る道々三雲政孝は一向にあがらない成果に苛立っていた。

今までも決して順調とは言えなかったが、こと光月圭一郎に関してはサッパリだ。

もっとも、それは三雲だけに限った事ではなく、どれだけ優秀な探偵でも警察でもなにもつかめてはいない。

それ以前に調べてもいないはずだ。

彼は三年前に死んでいる。厳密には殺されている。

その彼が今回の事に関われるはずがないのだ。

今まで封鎖されていた場所ならわからなくもないが、このMLTはそれからずっと開放されていた。多少のテナントが入っているためだ。

が、それもアビリティィー・ムーンの税金対策の道楽に過ぎない。それどころか完全にお荷物状態だった。

場所も場所であり、建物としてもそれほど広いわけではない。その代わり階が多いのでフォローできるのだが、多くの階を巡るといのは不便である。

それ故、客足は決して多くない。

特にイベントなどで客寄せをしないので尚更だ。

休日でも閑散としている。平日は……言うまでもない。

それでも三年間も維持できたのは光月圭一郎のお蔭だ。彼は三年分の資金を遺していた。今回の事件が起こる手前までは全て弁護士を通して指示していた。

三雲はその事が不思議でしようがない。

それに疑問を抱くのは三雲だけではないだろうが、ただの偶然として世間では片付けられてしまった。偶然とする事で無理矢理納得させようとしているのだろう。

「まるで、こうなる事がわかっていたみたいだな」

そうとしか思えない。

今回のイベントも三年前に光月圭一郎が高澤吉郎に開催するように言ったとか言わないなど、噂が飛び交っている。

もっとも、これは噂の域を出ない。

おそらくはデマだろう、と三雲は考えている。

何故なら、そんな事をしなくても高澤ならこうしたと思うからだ。

断定的な日時はわからなくても、この時期になにかをするであろう事は想像に難くない。

その理由はやはり資金だ。

光月は三年間の資金しか用意していなかった。それも、計算され尽くしたかのようにピッタリの額だった。

その資金がこのタイミングで枯渇する。

そうなるとうどうするか。

考えるまでもない。どこからか集めようとする。

資金がなくなって価値がなくなったMLTを壊すという手もあるが、それにもやはり資金は必要になる。

そうならばここでなにかイベントを開催するのが手っ取り早い。

もともと機能していた場所だから人はいる。

三年前に亡くなった光月関係の事を企画すれば話題になる。

それくらい容易に想像できる。

だとしたら、光月圭一郎がなにか仕掛けた可能性が浮上してくる。

時間ではなく、なにかきっかけが.....

「ったく.....」

三雲は頭を搔く。

「それがわかりゃ苦労しないんだって」

結局、全ては想像でしかない。

机上の空論で片付けられてしまうかもしれない。

なにしろ、なんの確証も得られないのだ。

そもそも、現場の調査ができないのだから仕方ない。

このくらいで諦めていたらこの仕事はできないわけだが。

関係者の話は聞けない。

現場も調べられない。

聞き込みをしてもこの場合はどうにもならない。

光月圭一郎という人物は業界では有名だが、そのプライベートは一切明かされていない。

実際の年齢すらわからないのだ。

週刊誌などが書いている年齢がバラバラなのがその証拠だ。どこから得た情報なのか、その情報源によって違うのだ。

一言で言えば `謎、なのである。

娘がいたがその娘も本当の光月圭一郎を知らないだろう。そもそも、母親が明かされていないのが不思議なのだ。

母親側が認知しろと言って養育費を払わせる.....というのならわかるのだが、この場合は違う。光月圭一郎は普通に父親として一緒に暮らしている。

養女なのでは.....という噂もたった。

娘の母親は愛人なのでは.....なんて突拍子もない噂もあった。

だが、それら全てを否定して、光月圭一郎自らが実子である事を語ったのだ。

そう言われればそうなんだと思うしかない。

週刊誌などのマスコミは母親の事を追求したが、真相は闇のまま。

もっとも、一番追求していた週刊誌が廃刊した事で、この騒ぎはあっという間に収まってしまったのだが。廃刊の理由は言うまでもないだろう。

その前歴のせいだろうか、宣伝はすれども批判的なものは一切出していない。

記事にしない云々以前に、なにも事件らしいものはないのだ。

クリーンな経営で有名なのだから。

この前も、神崎グループ、紫藤グループという二大企業と共同出資で病院の建設をしている。

建設だけでなく、この病院は三社の資金援助で運営されているのだ。

そういう営業体制なので、裏では危険な研究がされているのでは……ともっぱらの噂だ。が、これも噂の域を出ない。

「……………ん？ そういば病院……………」

三雲は足を止めた。

「手掛かりらしいものもないし、とりあえずここに行ってみるか」

と、方向転換する。

「翔聖会総合病院か……………期待していいものかどうか……………」

悩みながらではあるが、三雲は翔聖会総合病院に向かって歩き出した。

あたしはまだ逃げていた。

っていうか、もう疲れた。

「はあ……はあ、はあ……はあ、はあ、はあ……」

なんだか全身の力が抜けそうだよ……。もう、体力使い果たしちゃった感じ。

I can't move. な感じだね。

追いかけてきている気配もないし、大丈夫だよ。

逃げるがウィナーって昔のピープルも言ってたし。

ああ……脳が酸素をくれと叫んでいる。

ブレインのセンターでオキシジェンとシャウトしたセル！

思考回路が壊れてきている気がするよ。

なんだか、自分じゃない気がするよ。

それ以前に、人として壊れてきている気がしなくもないよ……。

後ろを向いても前を向いても真っ暗闇。

輝かせようにも疲れていて無理！

もう、ぜいぜいと女の子らしからぬ息になってるし……。

へなへなとその場に崩れる。

もうダメ……力入んない。

『もう、鬼ごっこはおしまいなの？』

冷たい声がした。でも、あたしの声だ。

「ど、どうして……」

どうして目の前にいるの？

あたしは必死で逃げたのに……。

どういう事なわけ？

『あなたはあたしなのよ。逃げるなんてできると思っているの？』

ニッコリと目の前のあたしは笑った。

「ふ、ふざけないで」

あたしは身体の中から力を振り絞って立ち上がる。

よたよたと危なっかしいけど、それでもなんとか立ち上がった。

『あらあら無理しちゃって……。どうせ消えちゃうんだから、ゆっくり休んでいればいいのに』

自分の声ながら嫌な感じだ。

なんでこう……むかつかなきゃいけないわけ？ 自分の声に！

「あいにくだけど、消えたくないの。それよりも、ここから出して！」

すると目の前のあたしはニヤリと笑った。

『ここから出す？ 言ってる意味がよくわからないわね』

「はあ？ あんたっておバカさん？ やっぱ、本物の方が偉いわね」

『莫迦はあなた。ここはあなた自身の中。あなたの心を具現化した世界。……つまり、ここがあなたの心の中』

「……………」

言葉が出なかった。

心の中の世界。

それは見た事がある。もちろん自分のじゃないけど。

その世界は現実の世界と似ていて、楽しそうな世界だった。

それは過去の記憶によるものだから？

ううん、そうじゃない。

蔭はあったけど、それでも救いはあった。

じゃあ、あたしは？

真っ暗じゃない。

右を見ても左を見ても、

前も後ろも、

上も下も……………。

そんな……これがあたしの心の中？

あたしは輝きの使者だよ。

あの時、あたしはMLTで人々の心を輝かせようとした。

そのあたしの心がこれ？

冗談でしょ？

冗談に決まって……………ないかもしれない。

あながち嘘じゃないかも。

そう……あたしは勘違いしていた。

輝いているあたしがみんなを輝かせるんじゃない。輝かせる力を持っていただけ。

そう……あたしは闇の中にいた。

あたしは膝をついた。

『御理解してただけて？』

あたしが見下ろしていた。

翔聖会総合病院。そこに三雲はいた。

院長と話ができればいいのだろうが……。

「そもそも、院長もなにも知らないだろうな……」

この病院は院長ですら特に権限がない。

肩書きのみで、普通に診察を行っている。

実際の院長は各企業のトップなのだ。

その中の一つであるアビリティー・ムーンは、資金のみを提供しており、運営には口を出していないのが現状だ。

その資金も光月の個人資産だというのだから驚きだ。

会社の名を借りて私利私欲の為に私財を投入している……という、わけのわからない事をしている。なにせ、利益がないのだ。金銭的ではないにしろ、名誉としての利益はあるのかもしれないが、それを本当に望んでいたのだろうか。光月圭一郎ほどの人間が、その程度の考えしかなかったのかが怪しい。

なにしろ、この病院の建設を提案したのが光月圭一郎であり、他の二社に声を掛けたのも彼だ。

その席で彼は、自身は資産のみを提供する事、運営は神崎と紫藤の両者に任せる事、という二つの事を宣言した。

そして、これは社会福祉のためであり営利のためにこれを建設するわけではない、とも述べた。

事実、各企業は出資のみで収入を得ていない……と、少なくとも三雲が調査した結果はそうだった。

「まったく……光月が関わると変な感じがするな……」

絶対になにかある。そう思わせるものが光月にはある。

なんの計略もなくこういう事をするはずがない。

むしろない方がおかしいのだ。

しかし……なにもそういったものが浮かんでこない。

来てみたはいいものの、結局どうすればいいものか見当もつかない。無駄足だったか……。

「大丈夫か……？」

「う、うん……」

と、虚ろな目をした女性とすれ違った。女性は男に支えられてやっと歩いているといった感じだった。

その虚ろな目――いや、それは少し違うか。

その目は今を見ているとは思えなかった。ここではないどこか遠くを見ているようだった。

それに加え、彼女自身がこの場にそぐわないように思える。

まるで水の中に垂らしたインクのように……。

やがて消えていってしまうのだろうが、違和感は否めない。

しばらくその二人を目で追ったが、エレベーターに乗ってしまったのでそこまでだ。

わざわざ追いかけてよとは思えなかった。

ここまで来てしまって、やっぱりなにもないでとんぼ返りするのなんてなんとなく勿体ないと思った三雲は、アテもなく院内を歩く事にした。

翔聖会総合病院は、特に変わったところのない普通の病院だ。少なくとも表向きは。

成り立ちなどが変わっているだけだろう。

外観も奇をてらったものではないし、奇妙な科があるわけでもない。

内科、外科、小児科、眼科、耳鼻咽喉科、歯科、皮膚科、泌尿器科、産婦人科、整形外科……その他、なんでもありだという事が特徴といえばそうだろうか。

ここだけで全て事足りる、とはまさにその通りだ。そこいらの大学病院を遥かに凌駕している。

その為、かなり広大な敷地となっているし、建物も大きい。

三企業の出資でなければ到底実現できなかっただろう。設備も充実しており、最新のものがいち早く導入されている。

病院でありながらトップが医者でないために、医療ミスが院内で処理される事はない。医療ミスをした場合は即座に公表され、それ相応の厳罰が与えられている。

そういった姿勢だろうか、変な言葉だが、繁盛している。医師の間でも常にピリピリと緊張が漂っている。ここにいる事は名誉ではあるが、ミスは赦されない。即、免許を失う可能性だってある。

それに加え、医局のような組織でないために、各科間にわだかまりのようなものはなく、見事な連携が現実にある。

教授・助教授……などといったポストもないため、平等といえば平等だ。一応、各科に部長という役職はあるが、特に待遇が変わるわけでもなく、権限があるわけでもない。

むしろそういったものがあつた方がいいと言う人もいるが、ここはこれで上手く成り立っているのだからそれでいいのではないだろうか。ある意味、理想的すぎて現実味が無い。

各社の幹部には、もっと営利を重視してもいいのではないかと、という意見を言う者がいるが、各社の代表はそれに耳を貸す事なく、当初の状態を維持している。

もっとも、アビリティ・ムーンには運営に関して口出ししないという条件があつたために、高澤吉郎は静観を決め込んでいる。資金が全て光月圭一郎の私財で賄われているいじょう、特に問題ではないのだ。どうでもいいのだ。むしろ、医療に貢献しているという事で、世間での評判は悪くない。これは企業にしてみればプラスだ。そのプラスが自らのマイナスなしの結果なのだから万々歳である。

「まったく……………」

一向に進展しない状況に苛立ちを隠せないまま、三雲はリノリウムの廊下を歩いていた。

誰かの見舞いに来たように花束でも持ってくればよかったな……。手ぶらで歩いていたら不審人物じゃないか？ なんだか目立つかもな。

とか考えながら歩く。

どこからどう見ても普通の病院でしかない。

なにか期待しているのか、俺は……。

ここでなにかが起こって欲しい、と？

だとすれば、俺はどうすればいいのか……。

あの死神に殺されればいいのか？

「どうして気付かなかったんだ」

三雲は足を止めた。

「そうだよな。あいつならなにか知っていてもおかしくない。第一、あの場にいたって事は……」

と、そこまで考えて、

「いや、ダメだ。教えてくれるはずがない。あいつはいつもはぐらかすからな……」

結局無駄だという事に気付く。

これ以上ここにも収穫があるはずもない、と思った時、どこからか声が聞こえた。

「なるほど……今回のサンプルでも駄目だったようだね」

「ホント、生命ってちっぽけね」

どこから聞こえてくるのか詳しい場所はわからないが、声からするに十代のようだ。

「カルク一口さ、もうちょっと面白そうなの見つけてよ」

「無茶言わないでよ。私だってそんなに暇じゃありません。自分たちで捜せばいいじゃない」

「それこそ無茶ってもんだぜ。オレたちにゃわからないんだからよ」

「そうだぜ。プレーニの言う通りだって」

声からするに四、五人のようだ。もっとも喋っていない者がいれば別だが。

少なくとも会話に参加している人数はそんなものだろう。

「なんの話をしているんだ？ それに……」

彼らが呼び合っている名前、変な綽名だな。

だが、今はどうでもいい事だ。

いや……気にはなるのだが……

声を頼りに探してみるか。

どうも職業柄こういう性質のようだ。

ただの好奇心とも言い換える事ができるけども。

三雲は耳を澄ませて声を聞き逃さないように注意する。

「さて、次のサンプルが見つかるまでは会合もないですね」

もう終わりなのか？ せっかくこれからだってのに。

「じゃあ、次はオレたちも行動してみるか？」

「そうだな、たまにはいいよな」

ん？ この部屋か……。

三雲はその部屋の前に辿り着いた。

扉越しに声が聞こえてくる。

しかし、この前にいるのは危険だ。見つかってしまっは意味がない。

三雲は少し離れた曲がり角から様子を窺う事にした。

「じゃあ、今日は解散だ」

荷物をまとめるような音がかすかに聞こえる。まるで委員会が終わったような雰囲気だ。

もうすぐだ……。どんなやつらなんだ？

気になった事は徹底して調べておくのも悪くない。いつどこで役に立つかわからないのだから。事件の鍵がどこにあるかなんて誰にもわからない。真実へ導くパン屑がいつもあるわけではない。

しかし………何分経っても誰も出てくる気配はない。

場所が違ったのか？

それとも、裏に扉でも……。いや、ここは病院の一室だ。ネームプレートがないので入院用ではないようだ。少なくともここに入院している者はいない。

かといって、部屋の名前が書かれたルームプレートがあるわけでもない。

なんの部屋なんだ？

と、いまさらだが、ここは入院患者用のフロアではないようだ。どの部屋も同じように部屋の名前がない。

それどころか人の姿もない。

いや、それはどうでもいい。

問題なのは誰も出てこないという事だ。

聞き間違いだったのか？ 俺の幻聴だったのか？

自分の耳を疑わずにはいられない。

どういう事なんだ？

ちくしょう。余計な事に首を突っ込んだせいで、わけのわからない事が増えてしまった。

………どうする？

ええい、ここは………。

三雲は意を決してそのドアの前に向かった。

そして、前で深呼吸をするとドアを開けた。

………。

そこには誰もいなかった。

そこにあるのはパイプ椅子だけだった。

それが五脚。

確かにそこには誰かがいたようだ。しかし、その姿は煙のように消えてしまっている。

「ったく………もうちょっとわかりやすいものはないのかね……」

三雲は頭を掻いた。

「しょうがない。もう一度MLTに行ってみるか。警察の封鎖が解けていればなんとかなるかもしれないしな」

三雲はドアを閉めると、そのまま病院をあとにした。

あたしの心の中は真っ暗闇なんだ……。

でも……。

そうよ。イメージしてみれば……。

あたしの心の中だっというなら、あたしがどうにかできるかもしれない。

でも……。

あれだけ明るくなれって思ってたのになんにも変わらないって事は……やっぱり無理なのかな……。っというか、あたしってダメダメさんなんだね。

『どうしたの？ 自分が輝いていない事を認めて消える気になった？』

あたしがなにか言ってるけど気にしない。

どうにかしてここを突破しないと……。

想像——イメージ。

思ってるだけじゃダメだったとすれば？ ちゃんとイメージしないとダメだったとすれば。

おっ！ その事に気付くなんてあたし天才！ 偉人じゃん！

というわけで早速……。

あたしは念じてみる事にした。

ここではない場所を。

さて、MLTに帰ってきたはいいものの……やはり警察の封鎖は解けていなかった。

どうしたもんかね……。

と、三雲がMLTを見ているのと同じようにMLTを見ている女子高生らしい二人組がいた。

こんな所でなにをしているのか。

またわからない事に首を突っ込んでしまうのかな……因果な性分だね……。

などと思いながらも、どうしても耳がそちに集中してしまう。

「もう一度電話してみてくださいませんか？」

「そうですね」

どうやら誰かに電話を掛けているようだ。

「やっぱり留守電になってしまいますね」

もう一人に告げる。

「じゃあ、伝言を残しておくか」

「そうですね」

そう言うと、

「もしもし、夏菜さん。呉羽彌季です。ちょっと話したい事がありますので、電話下さい。それでは」

と、電話を切る。

ん……？ なつな……？ どこかで聞いたような気がする名前だ。それに呉羽……これにも聞き覚えがある。

誰だったか？ というより、どこで聞いたんだ？

えっと……えっと……。

三雲は記憶の引き出しを探っていく。

絶対にどこかで聞くなり見た事のある名前だ。

それほどありふれた名前ではないので、何気なく聞いたという可能性は低い。仕事絡みで聞いたはずなのだ。

どこだったか……。

えっと……。

あっ！

そうだ！

確かこのMLTの設計者の娘がそんな名前だった。

そして、三年前の容疑者の名前が……。

これは偶然なのか？

こんな事ってあり得るのか？

なにかが俺をここに導いたのか？

仕組まれた事だとしても、俺は手掛かりをつかめるかもしれない。

よしっ！

自分を鼓舞すると二人の方に歩いていく。

トキと彌季は、三雲が近付いてくるのに全く気が付いていなかった。

「ちょっといいかな」

なので、そう声を掛けられた時、心臓が飛び出るのでは、というくらい驚いた。

「だ、誰ですか」

彌季が驚いた表情のまま訊く。

「失礼、驚かせてしまったようで申し訳ない」

と、すかさず名刺を二枚差し出す。

二人は反射的にそれを受け取る。

「探偵？」

トキは名刺と三雲を何度も訝しそうに見る。

「胡散臭い」

そして、それだけ呟いた。

「よく言われるよ」

しかし、三雲は動じる事なく対処する。そのニカニカとした笑いが尚更胡散臭い。

「……まあそれはいいけど、その探偵さんがオレたちになんの用？」

女の子なのに「オレ、か……と、三雲は少しトキに興味があいたが、今はそんな事をしている場合ではない。

「ちょっとMLTの事件……というよりも光月圭一郎の事を調べていてね。できれば君たちに協力して欲しいと思っている」

その言葉に二人は顔を見合わせた。

とにかく話だけでもしようという事で、近くの喫茶店に行く事になった。

席に着くと同時に三雲は、

「ブルマン、アイスで」

と、注文する。

まだウエイトレスさんも来ていない。なので、水すら運ばれてきていない。

そのあまりの行動に二人は目を丸くした。

「えっと……………」

「わたしは……………」

と、二人は慌ててメニューを見る。

メニューといってもテーブルの上に小さなプレートが立っているだけで、それほど種類があるわけではない。

……それほどない……のだが、今の二人には膨大な数に思えてしまう。

第一、まだウエイトレスさんが来ていないのでそんなに慌てる必要はないのだが、今の二人はどうしてだか冷静な判断力が欠けていた。

落ち着けばなんという事はないのに、それが大変な事のように思えてしまう。

「わたしは……アイスレモンティーをお願いします」

と、彌季が言った時、ちょうどウエイトレスさんがやって来た。

これはジャストなタイミングだったろう。

が、彌季が注文した事で、トキの頭は完全にパニックになっていた。

早く注文しなければ……。

どうしよう、どうしよう……。

その言葉が脳内をリフレインする。オートリピートで駆け巡る。

その慌てぶりを、三雲は少し楽しそうに見ている。

が、当のトキはそんな状況ではない。

あまりの事に脳がオーバーヒートしてしまいそうだ。

顔も紅潮し、熱くなっているのがわかる。

どうして喫茶店の注文でこんな事にならなければいけないのだろう。

視線はメニューを行き来するだけで一向に定まらない。それ以前に、文字が目に入っていない。

なにもない紙を見ているかのようだ。

もちろん、ウエイトレスさんは急かすわけもなく、じっと注文を待っている。

「えっと……………えっと……」

ご注文が決まりましたら……と、ウエイトレスさんが言おうとした時、

「オレは……………」

トキが顔を上げてウエイトレスさんを見る。その口から出た言葉は、

「メロンクリームソーダー」

だった。

ウェイトレスさんは笑顔で、かしこまりました、と言ってカウンターに向かった。

なんとか注文をしたトキは、疲労感に襲われていた。喫茶店の注文でこんなに緊張したのは初めてだった。というよりも、初めてでもないのに緊張したのが不思議だった。

ウェイトレスが立ち去ると、三雲は急に真剣な表情になり二人を見る。

「さて、率直に訊こう。君たちはMLTになんらかの関係があるね。MLTで起こった事件。三年前……もしくはこの間の事件に」

三雲の目は獲物を捕らえる肉食獣のようでもあった。瞬きせず、一瞬たりとも逸らさない。

「「……………」」

そういう事を訊かれると予想はしていたので驚きはしなかった。

二人はお互いの顔を見る。

「もちろん黙秘権はある。嘘をついても構わない。なにせ、俺は警察でもなんでもない。まして、これは誰の依頼でもない……ああ、強いて言えば俺自身の依頼だな」

と、緩急をつけるように途端に砕けた表情になる。

コロコロと表情が変わるな……と、トキは感心さえしていた。

「というわけで、これはお願いだ。強制じゃない。あ、ここは俺が奢る。これは君たちの時間を借りた謝礼だ」

さて、と言うと、再び真剣な表情になる。

「君たちはなにを知っている？ MLTにどういう繋がりがあるんだ」

その視線に射止められたのか彌季が口を開く。

「MLTは、わたしたちが初めて出会った場所です。だから思い出深いんです。なので、ふとMLTに行きたくなった……それが、あの場所にいた理由です」

彌季が喋る間、三雲はずっとトキの目を見ていた。

彌季は本当の事を言っているようだが、嘘を言っているようが動揺する事はないだろう。それは、自分が整理して考えて喋っているからだ。

こういう場合、ボロを出すのはたいてい同席者だ。相手がなにを喋るのかテレパシーが使えるでもない限りわかるはずがない。それに対する反応で真偽を見極める事もできる。

そして、そうしてトキの目を見ていた限り、彼女は一瞬表情を強張らせたが、それ以外の反応はなかった。

なにかを隠してはいるようだが、おおまかに嘘はついていないらしい。

いったい、なにを隠している？

残念ながらわからない。だが、もしかすると……と思えるものがある。

(ここはカマをかけてみるのもありか……)

「なるほど……あそこで初めて……。その、さっき君たちが電話していた相手もそうなのかい？」

関係ないと答えるか……？ さあ、どう答える？

三雲は彼女たちの回答を待った。

「それは――」

と、トキが言い出そうとした時、

「お待たせしました」

と、ウエイトレスさんが注文した飲み物を持ってきた。

(なんともまあ、見事なタイミング。神様の悪戯か？ それとも、このウエイトレスもグルだったりして.....)

と、ちょっとふざけた事を考えてしまう。

これで少しは空気が弛んだか？ それならいいのだが.....。

三雲は彼女たちの反応を待ちつつ、テーブルの上のアイスコーヒーのストローを口に含む。そして、上目遣いで彼女たちを見ながらちゅうちゅうと飲む。

「.....はい。わたしたちが電話をしていた相手ともあの場所で初めて会いました」

と、答えたのは彌季だった。

(なるほど、この子は頭が切れるタイプか。それとも、無理をして冷静に対応しているだけか。どちらにせよ、注意はしておいた方がいいようだな)

と、三雲はアイスコーヒーを飲みながらこれからの進め方について思案する。

「なるほど。で、どうして君たちはあの場所へ？ なにかネットでの知り合いだったとか？」

インターネット上でなく実際に会うのをオフ会とか言うらしいが、そういう類のものなのだろうか。

いやいや、と三雲はその考えを振り払う。

こんな女の子がインターネットなんてしているとは思えない。イメージとしては、男がしているものというのがあるし.....というのは偏見なのか？

いや.....女の子だからこそ会いたいという気持ちは強いのかもかもしれないな.....。

「あ、それは.....」

トキは助けを求めるように彌季を見る。

彌季はどう説明しようか考えているようでトキの視線に気付いていない。

「オレたちは.....」

「わたしたちは、ただあの場所に興味があって、それぞれ一人で来ていたのでせっかくだから一緒に回ろうと.....それだけです」

二人の声がわずかに重なる。が、トキは彌季に任せてすぐに黙った。

(なるほど.....無難な回答をしてくる。やはり嘘はついていないのかもしれないが、小さな嘘はいくつかあるようだな)

と、それは完全に勘でしかない。

探偵の勘がそう思わせるのだ。

「なるほど。ありがとう。.....ところで、もう一つ二つ訊きたいんだけど、三年前にあそこで起こった事件についてはなにか知ってるのかい？」

その質問に対して二人は動揺を隠せなかった。みるみると青ざめていく。

(なるほど……。そろそろ冷静を保っていた糸も切れかけているのか……)

三雲はじっと彌季を見る。

彌季に関しては、三年前に関係がないはずはないと踏んでいた。なので、それに関しては予想通りだったといえよう。

「呉羽、という決して多くない名字である場所にいれば誰でもそう思うだろうが。

(それにしても、もう一人も三年前に関係があるのか……)

ある程度予想はできていたものの、これで確信が持てた。どういう関係なのかまでは断定できないが、被害者の友人というのが最も有力だ。他の可能性としては、三年前の事件の際、実際に現場にいたとも考えられる。確か、彼女くらいの歳の参加者もいたはずだ。

(思わぬところで出会った関係者というわけか……)

「……答えたくありません」

彌季は絞り出すような声で言った。

「悪かった。これに関しては訊かない。赦して欲しい」

「はい……」

なんとか頷く彌季だが、両肩を抱くようにしてなんとか震えを抑えている。

(やはり、父親が犯罪者というのは想像できないほどのものか……)

と、三雲は冷静に彌季を分析する。想像通りだと思って間違いないだろう。

彌季はこれ以上冷静に対応できないだろう。この勝負、三雲の勝ちのようだ。

もっとも、三雲はある程度の情報を持っていたのだから卑怯な勝負であった。いつでも相手を潰す準備は出来ていたのだから。

だが、彼の目的はそれではない。なんらかの情報を得るためだ。情報が得られなければ意味はない。

つまり、完全に潰してしまっただけは三雲の負けというわけだ。

これに関しては、もう一人一トキがいるので大丈夫だろう。彌季の助けなく彼女にどこまで対応できるのか……。さて、これからだ。

夏菜は学校にいた。それも屋上だ。

途端に景色が変わった。

それは、暗幕を外していくかのように唐突にその場に浮かび上がった。

「やった！」

強くイメージして、やっと暗闇の中から抜け出せた。

暗闇だとどうしても滅入ってしまうけど、知っている場所ならまだなんとか平静を保っていられそう。

『あらあら……。さすが輝きの使者を名乗るだけはあるってところかしら。ここまで出来るなんて、ホント上出来』

感心してはいるようだけど、どうも莫迦にされているようにしか思えないのは気のせい？

ううん、気のせいなんかじゃない。本当に莫迦にしてる。

絶対にそう！

この目の前のあたしは、あたしを莫迦にして楽しんでいるんだ！

見てなさいよ……。

そうやって余裕ぶってられるのも時間の問題なんだからね。

っていうか、あたしもどうしてこんな場所にしちゃったんだろうね……。

なんだか、イメージがあったのかな……？

実際にここに来た事なんてないはずなんだけどな……立入禁止で鍵が掛かってるし。

っじゃ、どうして？

うっわ～！

自問自答タイム？

マジ？

なんだか精神的に攻撃されてる気分。全部自爆なんだけど。

さて、気を取り直して……。

とりあえず暗闇以外の空間に出られたという事は、ここからもあたしのイメージでどうにかできるはず。

『あ、そうそう。一応言っておくけど、あたしを消そうと念じてても無理だからね』

「……………」

マジ？

そんなんあり？

念じててもダメって……どうすればいいわけ？

『可哀相だから教えてあげるわ。あたしを消して元の世界に戻る方法はね——』

目の前のあたしはニヤリと笑った。

『——あたしを輝かせるか、砕くか。どちらかよ』

輝かせるか砕く？

なに、それ。

『ちなみに、輝かせるにはあたしの心の中に入らないといけないけど、あなたにそんな能力はない――』

ご名答。

『――そして、あたしを砕くのは、あの死神さんでも無理』

あんですとー！

ん？ 今なんて……？

「ちょっと、あんたメビウスを知ってるの？」

『ええ、少しだけね。なにせ、オプスキュリテの側にいたんだし。でも、本当に少しだけしか知らないわよ』

「なるほど。つまり、まだ後者は可能性があるわけね」

『砕かれないと自負しているわけだけど』

「やってみなきゃわからないわよ」

『やれるのかしら？』

「やろうじゃない」

『どうやって？』

「え？」

『どうやって？ メビウスはここにはいない。召還する事なんて不可能。じゃあ、どうするわけ？』

「……………」

そうでした。

後者を試すにはあの死神さんがいないといけないんだ……。

あたしってば莫迦だよ……。

どうする？

どうしよ……。

他に方法はないの？

あたしの能力じゃ無理。

死神がいないので無理。

八方塞がり？

そんな……………。

でも、他に方法があるという可能性は？

だって、本当に自分の弱点なんて言うかな……。ブラフっていう可能性もあるじゃない。

でも……………。

だからといって、なにか思いつくわけじゃなくて……。

どうしたものでしょう……。

あたしは、屋上でぽつんと途方に暮れるしかないの……？

「もう一つ訊きたい事があってね。これはMLTとは特に関係ないんだ。俺が個人的に調べている事でね……」

そう前置きして二人をじっと見る。

彌季は動揺か、恐怖のあまりにガタガタと震えている。

脆弱そのものだ。

さきほどまでは勇猛な態度だったのに……。ここまで崩れるものなのか。それだけ、彼女にとって三年前の出来事は大きかったというわけか。

彌季とて、一度は乗り越えた壁ではあったが、思い出すとやはり震えが止まらない。

シュピーゲルと対峙した時はあれほどまでに強く言い切れたのに……。

やはり闇は払いきれないのだろうか。どこまでも付きまとい彼女を苦しめている。

トキは怯えながらも彌季を見ている。支える事ができない自分の無力さを痛感させられる。今の彌季になにも言ってやる事はできない。

なにもできやしない。

目が泳ぎ、視線が定まらない。

そんな二人を畳みかけてしまうかもしれないこの状況で、三雲はその質問を口にした。

「君たちはメビウスという死神を知っているかい？」

その言葉に二人は明らかな反応を示した。

知っている。

三雲がそう断定してなんの不思議があるだろう。

それも、今まで訊いてきた女子高生たちとは明らかに違う反応だ。これは、実際に会った事があるに違いない。

そう……話に聞いただけでここまで過剰に反応する事はないのだ。

可能性としては友人がメビウスの犠牲になったという事も考えられなくはないが、それでもこの反応はおかしい。

実際に会ったとしてどこで……。

MLTしかない。

三年前……とは考えられない。

メビウスの噂を聞くようになったのはここ最近だ。

という事は、最近のあの事件だ。

三雲もMLTでメビウスに会っている。

その時は、終わったあとだった。

つまり、三雲は居合わせはしたものの、関わってはいない。

だが……彼女たちはそうじゃない。関わっている。

おそらく、攻略したのは彼女たちだ。

そして、彼女たちはメビウスの敵とみなされる事はなかった。だからこそこにいる。

さて、あそこでなにがあったのか……。

「正直に言おう。俺は今まで幾度かメビウスに会っている。敵としてではなく、ただの傍観者としてだがね。ついでに言えば、メビウスがこの世界とは違う世界の住人だという事も本人から聞いた。まあ、あいつ自身、どうしてこうなっているのかわかっていないようだったけどね。導かれるままとかお茶を濁した言い方をするもんでね」

三雲はできるだけ砕けた空気にしようと喋り続ける。

だが、いくら重い空気を取り払おうとしても、その前の質問が致命傷のようになっていて取り払われる気配はないし、こういう話題で取り払おうという事が本末転倒なのだ。

「あんたは、あの死神のなにを知ってるんだ？」

やっとの事で言葉にしたのはトキだった。

「オレたちは、メビウスに会った事がある。そして、殺されかけた事もある」

殺されかけた……？

そこに三雲は心を惹かれた。

「殺されかけた、とは？」

トキは許可を求めるように彌季を見るが、彌季はそれにも気付く様子はない。

「……オレたちには、ある能力がある」

ある能力？

どういう事だ？

この子たちは普通の人間のはずだ。

多少、数奇な運命なのかもしれないが……。

「その能力でオレたちは人々を『輝きの園』に導こうとした。オプスキュリテというヤツの指示でね」

初めて聞く名前が出てきた。

オプスキュリテ。

ナイトメアのようなヤツだろう、と三雲は想像する。

「だが、最終的には、世界に選ばれている、とか言ってオレたちを助けた。わけがわからなかったよ」

トキはそれを恐怖体験のように話し続ける。

確かに彼女たちにとってそれは直接死に結びついた初めての経験だった。

未知の恐怖が迫った瞬間だった。

鳥肌がたつのは当たり前。思い出すだけでも十分な恐怖を感じる。

「なるほど……。俺はあいつの敵として向かい合った事がないから想像でしかないが……なるほどな……」

三雲はふむふむと頷くばかり。ただ静かに話を聞くだけ。

「だが、あいつは敵対しないものには、全く敵意をみせない。そういう点では……無差別でないという点では許容できるだろう。まあ、その敵かどうかの判断が我々にはできないというのは恐怖になりうるがね」

それだけ言うと、三雲は無言になりアイスコーヒーを飲み始めた。

時折ストローでかき混ぜたりしながら無言で飲み干す。

「さて、そろそろ出ようか……。あ、もちろんこのままここにも構わない。勘定は済ませておくから」

そう言うと、三雲は伝票を持って立ち上がった。

「待って下さい」

彌季が引き止めるように声を掛ける。

「わたしたちも行きます」

そう言うと静かに立ち上がる。

「彌季……………」

まだ青い顔をしている彌季を心配するトキ。彌季を支えるように一緒に立ち上がる。

「あなたには話していない事があります。もしよければ力になってもらえませんか」

まだ震えが止まらないようだったが、それでも力強く言った。

「まだ話していない事？ それは興味があるね。それに、俺にできる事なら協力しよう。光月圭一郎……もしくはMLTに関係する事なら無償でお引き受けしましょう。ああ、死神に関する事でもいいですよ」

「どれに関係するかはわかりません。今の状況では判断できないんです」

彌季はわずかながら落胆した。

「終わってからも構わないが」

「それなら……」

三雲の言葉で少し安心したのか、彌季はため息を吐いた。

「とにかく座ろうか」

「はい」

と、一度は腰を上げたものの、再びそのまま腰を下ろす。

「それで、話していない事というのは？」

早速、話を切り出す。

「わたしたちがシュピーゲルと名乗る者に会ったという事です」

彌季……と、トキは彌季の腕を握る。

「そのシュピーゲルは、わたしたちが輝いていないと言いました」

「なるほど……確か、君たちは人々を輝かせる……んだったね」

三雲は莫迦にするでもなくいたって真剣に訊く。

「はい……。でも、そのわたしたちが輝いていないと……」

「シュピーゲル……ねえ。鏡か……」

三雲はなにかを考えているようだが、サッパリ見当がつかない。

「わたしたちはなんとかシュピーゲルをやり過ごしました。でも、もう一人の仲間の夏菜さんと連絡がとれないんです。もしかしたら彼女は……」

今にも泣き出しそうな弱々しい声になる。

なるほど……。設計者の娘がそいつに囚われているかもしれない、というわけか。おそらく、そのシュピーゲルとかいうヤツも、メビウスと同じなんだろうな……。

という事は、メビウスが出現する可能性が高いというわけか。

ならば好都合。

「なるほど……。そのもう一人の彼女はシュピーゲルに襲われている真っ直中かもしれない、と……そういうわけだね」

彌季は小さく頷く。

「じゃあ、彼女がいそうな場所に行ってみようか」

そう言うと、腰を落ち着いたばかりではあるが三雲は立ち上がる。

二人は三雲の行動の迅速さに少し慌てるもののそれに従う。

彌季とトキは、会計を済ませて表に出たはいいものの、これからの行動をどうするべきか考えあぐねていた。

夏菜がいそうな場所なんて見当もつかない。

唯一考えられるとすれば自宅くらいのものだ。もちろん、MLTにいないとするならの話だ。現にMLTにはいなかったのだから最も可能性があるのは、やはり自宅という事になる。が——それには問題があって……。

「さて、彼女がいそうな場所は見当ついたかね」

「おそらく自宅だと思います。……他の場所はちょっと……」

「オレも同感だ。だいたい、この前初めて会ったわけだしな。そんなに詳しく知らないし」
(なるほど。それは本当のようだ。詳しくは知らないというが、どの辺までが詳しいかそうでないかの境界線なんだろうな)

つついついつもの癖で深読みしてしまう。

いかんいかんと首を振る。

(だが、知っているかどうかなんてこの際関係ないかもな)

「じゃあ、彼女の自宅に行こうか」

そう言うと、三雲はスタスタと歩き出す。

迷っているという感じは微塵もなく、目的地を目指しているという歩き方だった。

「あ、あの……」

彌季は自分たちが夏菜の自宅の場所を知らない事を告げようとしたのだが、

「どうしたんだ。急いだ方がいいかもしれないんだろ」

と、三雲は聞く様子もなく歩いていく。

(もしかして、この人……夏菜さんを知っている?)

その彌季の直感は当たっていた。

三雲は三年前の調査の際、楓春彦宅を訪れた事がある。彼の妻である秋子に話を聞くためだった。だが、彼女は三雲に会う事はしなかった。あまりの衝撃的な事になにも話す気になれなかったのだ。

三雲の記憶の片隅には、その時に一緒にいた二人の少女がわずかに残っている。確か姉の方は冬実といったか……などと、当時の事を思い出しながらその場所を目指している。

懐かしい……というには表現がおかしいが、それに似た感情になる。

少しでも当時の様子を知りたい……。

気持ちが逸り、自然と歩調が早くなる。

今にも走りださんとするようなペースに二人は小走りになる。

この頃になって、ようやくトキも気付いた。

「なあ、もしかしてこの探偵、夏菜の家を知ってるのか？」

三雲に聞こえないような声で彌季に言う。

「そのようですね。わたしたちも知らないのに……」

「その辺は、さすが探偵ってところか？」

「そうですね」

彌季は眉をひそめる。

「どういう事だよ」

「わたしが夏菜さんの事を話したのは、先程が初めてです。それなのに、探偵さんは夏菜さんを知っている……不思議じゃないですか？」

「……………ん？ そういやそうだな」

少し考え、トキもその不自然さに気付いた。

「だったらなんで……」

「考えられる事は、探偵さんは以前から夏菜さんを知っていたという事です」

「どうして？」

「おそらく三年前の事件の関係だと思います。……という事は、探偵さんはわたしについても知っているはずですよ」

一瞬、彌季の表情が翳る。

「さて、もうそろそろで着くぞ」

少し前から声が掛けられる。

「へえ～……こんなところなのか」

と、トキは感心したように周りを見ている。

一方の彌季にはそんな余裕はない。目の前の探偵が自分の過去を知っていると推測できた今、気を許していいものかどうか……悩まざるを得ない。

「だけど、今は信じるしかないでしょうね」

彌季はぼつりと呟いた。

三雲は三年前の事を訊きはしたが、彌季が拒否すると謝罪してくれた。それは彼なりに案じてくれたと解釈するべきだと思う。なら、信じてもいいんじゃないだろうか。

そう判断し、今は三雲を信じる事にした。

顔を上げると、少し先の一軒家の前で三雲が立ち止まって二人を待っていた。おそらくそこが夏菜の家なのだろう。

二人は駆け足でそこに向かう。

その途中、野球帽を目深に被った少年とすれ違った。

到着すると、なかなか大きな家である。

(彌季は雰囲気からしてそうだけど、夏菜も結構なお嬢様じゃないかよ……)

と、トキは率直にそう感じた。

「ここが楓夏菜宅だが……」

家をじっと見ていた三雲が口を開く。

「どうも人の気配がない」

確かに、昼間だからという事もあるが、明かりが点いていない。

しんとしていて音がない。

「留守なんじゃないのか？」

トキが至極もったもな事を言う。

もちろんその可能性もある。

だが、到底そうとは思えない。

そんな事を言ったトキもそうだが、三人とも直感でそれは感じていた。

夏菜はここにいる。

そして――なにかが起きている。

「とにかく、中に入ってみよう」

そう言うと、三雲は門に手を掛けた。

「ちょっと、勝手に入るのは……」

その行動を彌季がとが咎める。

「俺だって伊達に探偵をしているわけじゃない。これが立派な家宅不法侵入になるのは承知している。だが、それよりも彼女が心配じゃないのか？」

(罪を犯して友人を助ける……。結果がそうなればいい。でも、本当に誰もいなかったら？ それはただの空き巣じゃない？ 別に盗む気はないけど)

逆に三雲に訊かれた彌季は言葉を失い考え込む。

天秤にかけるような事ではないとはわかっている。

頭では理解していても、なかなかそうできないのが人間だ。

「彌季、ここは探偵の言う通りだとおもうぜ。行ってみよう」

トキが彌季の肩を叩く。

「わかりました」

それが後押しになり、ようやく彌季も心を決めた。

意を決して門に手を掛けた刹那――

「おやおや、探偵さんじゃないか……」

背後からの声三人は一斉に振り返った。

そこに立っていたのは彼女たちよりもすこしだけ年上——二十歳くらいの女性だった。

だが、どうも普通の女性には見えない。

なにかが変なのだ。

服装は普通だ。奇抜な格好ではなくカジュアルな感じ。

外見がおかしなわけじゃない。綺麗な人だと思う。そう——おかしくはないのだけれど、気になる事がある。

感情が感じられない。

無表情といえばそうなのだ。

「それに……………」

と、その女性は彌季とトキを見る。

「またキミたちか……。セカイに選ばれているとはいえ、キミたちも大変だねえ……」

と、言葉とは裏腹にそれほど大変そうには聞こえない言い方だ。

二人は不信感をその女性に向ける。

「あんたがここにいるって事は、この子たちの推測は当たっているという事かな」

三雲は女性に笑い掛ける。

「また首を突っ込もうというのかい？ 残念だけど、ボクは探偵さんを護る余裕はないんだが」

女性は抑揚のない声で淡々と言った。

「そうかい。だが、俺は自分の身は自分で守るよ。メビウス、あんたに護ってもらわなくてもな」

「「————」」

三雲が言ったその一言に二人は同時に鳥肌が立った。

三雲は目の前の女性をメビウスと呼んだ。

じゃあ、この女性が——

途端に震えが二人を襲う。

今はそうでないとはいえ、一度は命を狙われたのだ。恐怖するなという方が難しい。

「この人が……メビウスって本当なのか？」

トキが思い切った顔で三雲に訊く。

「ああ、そうか……君たちはあの格好でしか会っていないわけだよな。それが普通なんだが。ああ、それ以前に会って生きてる人間の方が少ないか」

と、長々とした独り言を言ってから、

「信じられないだろうが、この女性がメビウスだ……でいいんだよな」

と、女性に視線を向ける。

「間違っただけじゃないが正しくはない。ボクはカノジョの身体を借りているだけだ」

二人にしてみれば、こうして話している事が既におかしな事である。それを三雲は平気に行っている。

「なあ、どうやら本当らしいな……」

と、彌季に言うトキの声は震えている。

「……………」

彌季はなにも言えず、ただ無言で頷いただけだった。

「ところで、あんたの相棒はどうしたんだ？ この前MLTで会った時はいたようだが」

相棒？ そういえば、二人がMLTで会った時ももう一人白いのがいた。

「ああ、クラインかい？ クラインならシゴト中だ」

仕事——もしかして、こうしている間にもあの白いヤツは……という想像をしてしまう。

「仕事中って事は、もしかしてここ以外でもなにか起こっているのか？」

どうやら三雲も同じ考えを抱いたらしい。

「いや、クラインの適合者の仕事だ。クラインは今は表には出ていない。ボクたちも、適合者のセイカツを無闇に乱すような事はしたくないのでね」

と、およそ死神らしくない事を言う。

「という事は、彼女も同意の上なのか、今回も」

「信用が必要かい？ なんなら代わるが？」

「そうだな……この子たちが不安だろうからな」

「……なるほど。だそうだ、代わろうか」

と、メビウスが言った瞬間、女性の顔が変わった。いや、変わったと言うよりは表情が戻ったという方が正確だろう。

「初めまして、鳥居優里亜です。よろしく」

と、優里亜は二人に手を差し出す。

しかし、二人は互いの顔を見るだけでどうしていいのかわからない。

「まあ、あなたたちは一度メビウスに狙われてるものね……。ごめんなさいね。メビウスってあたしにもよくわからないから……」

「知ってる……んですか？」

トキが怯えながら言う。

「ええ。メビウスが現れている時、あたしも外の状況を見る事ができるから。もちろん見ないようにもできるんだけど、あたしは見るようにしてる。あたしが知らない間になにかしているのは嫌だから。全部知っておきたい」

優里亜はじっと前を見る。優里亜の強い意志がその目から感じ取れる。

「人を殺すんですよね……」

ようやく彌季が口を開いた。

「そうね。確かに結果的にそうになってしまうのかもしれない。だからこそ、知っておきたいの。相手に罪はない。メビウスみたいなヤツに操られているだけかもしれない——」

「だったら！」

彌季が言葉を遮る。

「……だったら、どうしてそんな事ができるんですか！」

「だからこそ、なの」

優里亜は柔和な表情で彌季を諭すように言う。

「だからこそ、その人の死を知っておかなければいけないの。メビウスが消したら、痕跡は残らない。あたししかわかる人はいないの。誰にも知られずにこの世界から存在が消えてしまうの。だったら、覚えておく事ができるあたしが覚えておかなきゃいけないと思うのね」

「それは……それはそうかもしれないですけど……なんて言うか……」

彌季は上手く言葉が出てこず俯く。

「自分の事を正当化しようと思っただけかもしれない。結果的に適合者を殺しているという事には変わりはないわけだから、あたしは殺人者なのかもしれない。それはもう、都市伝説の死神そのものなのかもしれない」

優里亜は哀しそうな表情になる。自らをそう認めるのは、やはり辛いものがある。大きくみればそうなのだが、どうしても逃避したいという気持ちがあるのは否めないというものだ。

「つまり、本当に死神だと？」

彌季が訊く。

優里亜の方は、改めて訊かれるとそれは辛い。

「そうね。でも、誰彼かまわずというわけじゃないわ。……といっても、あたしが選んでいるわけでもないんだけど。なにせ、メビウスが勝手にしちゃってるわけだし」

「あなたはそれをメビウスという別人格のせいにしてしているだけじゃないんですか？」

「なるほど……あなたは、メビウスがあたしの中のもう一つの人格で、本当はあたしの望みじゃないか……そういうわけね」

「そうです」

「あたしの中にいるという点ではそうかもしれないわね。でも、多重人格とは違うわ。あなたたちも、以前に巻き込まれたわけだからわかるでしょ？ オプスキュリテはあの彼の中の人格じゃなく、全く別の存在だって」

「……はい」

彌季は小さいながらもハッキリと答えた。

「すみません。ちょっと言ってみただけなんです」

「合格かしら？」

「自分でもよくわかりません」

「そうね、あたしもよくわからないわ。卑怯だけど、そうするしかない、メビウスに委ねるしかないのも事実なの」

「ありがとうございました。話ができてよかったです」

どうやらそれで彌季の緊張が解れたようで、スッキリとした笑顔になっている。

「……さて、長話をしてしまったわね。あのメビウスが反応したんだし、なにか起こってるんでしょ？ あいにく、メビウスはなにが起こっているかわからないみたいだから……あたしも事情がわからないんだけど……」

優里亜は救いを求めるように三雲を見る。

「俺たちも推測でしかない。シュピーゲルと名乗るヤツが関わっている可能性が高いというだけだ」

「シュピーゲル——鏡の幻惑師か……。どんなヤツなのかしらね……。っていうか、また消さなきゃいけないんだよね……。やっぱり人殺しなんだよね……。改めて考えるとやっぱり嫌だな……」

その言葉を聞いて彌季は安心した。今までの話でもそうだったが、メビウスの器となっているこの鳥居優里亜という人は異常者でも、殺人嗜好者でもないという事だ。いたって普通の人なんだ、と思えた。それだけでも安心できる。

四人は玄関ドアに手を掛ける。

呼び鈴は押しても無駄だと思ったので、暗黙の了解のように誰も押さない。

てっきり鍵が掛かっていると思っていたのだが、どうだろう、施錠されていない。

ノブがゆっくりと動く。

一同は緊張した面持ちでドアを見る。

なにが起こってもいいように身構える。

「いくぞ」

そう言って、三雲は勢いよくドアを開け放つ。

—————。

変わったところはなかった。

異空間が広がっているわけでもなく、玄関の向こうには廊下が見える。

「お邪魔します」

と、一応言ってから三雲がまず中に入る。

それに続いて優里亜、トキ、彌季も中に入る。

無断で侵入しているので心苦しいが、今はそんな事を考えてられない。

「さて、あまり家の中を探索したくはないんだが……」

「こういう場合、たいてい自分の部屋じゃないかしら。それも普通だと二階にある場合が多いわよね」

と、優里亜が進言した事で、四人は二階へ上がっていく。

「それにしても、女の子の部屋に無粋な男が入るのもどうかと思うんですけど……」

と、優里亜が三雲を睨め付ける。

「な、なに言ってるんだ。そんな気はなくてだな……」

「はいはい、緊急事態だから仕方ないでしょ。ホントに……。あとで怒られて下さい」

と、軽口を叩き合っているのはわざとだろう。少しでも緊張を解そうとしているに違いない。

それ以前に、今は本来の優里亜だからといって、仮にもあのメビウスである。そのメビウスとこんな会話ができるなんて……と、二人は啞然とした。

そんなやり取りをしながら階段を上ると、三つの部屋があった。一つはすぐ左手に二つは廊下を挟んで向かい合うように。

「さて、問題はどの部屋なのかだが……」

と、三雲は勿体ぶった風に言ったが、所詮は演出に過ぎなかった。

考えるまでもなかった。

廊下を挟むようにしてある部屋の一つ——なにもない廊下突き当たりに向かって右手の部屋のドアに、

と、書かれたプレートが掛かっていた。ちなみに、その向かいの部屋のドアには `K A Z U M I ' s R O O M、のプレートが掛かっている。

これはもう一目瞭然である。

「さて、あたしは消えてメビウスに代わった方がいいわね」

そう優里亜が言うと、瞬時に纏っている空気が変わる。メビウスに代わったのだ。

こうも簡単に交代できるなんて……と、三人は感心してしまう。

「ここはやはり、君たちが行くべきなのか……。それとも、危険があるかもしれないと判断して俺が行くべきなのか……。デリケートな事が絡むわけだし、悩むな……」

と、誰から入るのかで三雲は悩んでいた。

今から入ろうとしているのは女子高生の部屋である。しかも本人に無断で。

普通ならば友人である彌季かトキに先に入ってもらうべきなのだろうが、今の状況ではどうなっているのかわからない。部屋に入った瞬間に仕掛けでもあって……と考えると、三雲が行くべきのような気もする。

「どうしたんだい？ 早く行こうじゃないか」

と、メビウスは躊躇う事なくドアを開けた。

「「「……………」」」

三人は同時に息を呑んだ。

部屋の中はどうなっているのか、恐る恐る覗き込む。

……が、特に変わった様子はなかった。

あまりにも普通で拍子抜けしたくらいだ。

可愛らしい内装で、ぬいぐるみが飾ってある普通に女の子らしさを感じさせる部屋……その部屋のベッドに横たわっている少女――夏菜を除けば、平和な女の子の部屋でしかなかった。

「夏菜さん」

「夏菜」

駆け寄ろうとした二人をメビウスが手で制止させる。

「不用意な行動がしない方がいい」

冷静というよりも冷淡な行動だった。

二人はその手に行動を阻まれたというよりは、メビウスが纏う空気に阻まれたといった方が正しいだろう。

その圧倒的ななにかに完全に気圧されてしまっていた。それは一種の恐怖だった。失神してしまいそうなほど、それを感じていた。

二人は、全身から力が抜けたようにその場にしゃがみ込む。

(確かにあいつの言うとおりで。見た目にはなににもないかもしれないが、こいつの同類が関わってるとなると厄介だからな)

と、三雲も冷静にそれを見ていた。

メビウスが無言のまま部屋に入っていく。そして、そのままメビウスは夏菜の額に手をのせる

。

「おい……………」

魂が抜けてしまったかのような二人に代わり、三雲が言う。経験上、敵ではない者に対しては危害を加えないと知っていても、どうしても不安を感じてしまう。

「大丈夫だ。カノジョに危害を加えるつもりはない。むしろ、カノジョを殺してしまうと、今度はボクがセカイに殺されてしまうからね」

と、相変わらずの無表情で言った。

「そ、それならいいんだが……」

メビウスは、だけどね……と前置きして、

「探偵さんを護る余裕はない。それだけは了承してもらいたい」

「俺を護る余裕？ それは、それだけ相手が手強いって事か？」

「それはわからない。ボクは誰がこういう事をしているのか知らないからね」

三雲は、じゃあ……と言いかけて言葉をのんだ。

「今回のボクは、カノジョたちを護るためにいるらしい」

「……なるほど。なら、それでもいい。俺は自分の身は自分で護る。少なくとも、彼女たちが安全ならそれでいい」

「ありがたい」

ひとしきり会話を交わしたメビウスは、今度はトキと彌季を見る。

「さて、どうやらここからはキミたちの能力が必要のようだ」

しかし、二人は先程の恐怖から立ち直れていない。

「どういう状況になっているのかわからない。急がないと、このカノジョが消されてしまうかもしれない」

と、脅すように言う。

しかし、それは事実でもあった。外からではどうなっているのかわからないのだ。肉体は無事だとしても、精神が破壊されてしまう可能性もある。

「君たちがなにかしらの能力を持っているのなら、急いだ方がいい。確かにメビウスの言うとおりだ」

と、三雲が二人に声を掛ける。

「友達を助けるんだろ？ だったら、君たちがしっかりしないと」

三雲は根気よく声を掛け続ける。

「残念ながら、今回はキミたちの協力がないとボクにはどうにもできないようなのでね」

メビウスにもどうする事もできない状況になっていた。

触れてみてわかった事だが、夏菜に作用している力は彼女の精神の中にある。そこに侵入する事はメビウスの能力外だ。

MLTの場合は人間の能力者によるものだったので侵入する事が可能だったが、今回はそうはいかない。

この状況で侵入するためには、精神世界に侵入する事ができる能力者の協力が必要不可欠な

のだ。そして、それができる能力者は――星霜トキ。彼女しかいない。

その事実を突きつけられて、トキは責任というものを感じてしまう。

「気負う必要はない。ボクたちを導いてくれればいいだけだ」

と、メビウスは自分の二つ名が「導く者、だ」というのにそんな事を言う。

「トキ.....やってみよう」

今はなにも出来ないセパレイターである彌季は声を掛けるしかできない。

「.....」

トキは目を閉じて考える。

もちろん、夏菜を見捨てる事なんて論外だ。だが、全てが自分にかかっている.....というのは、いささか責任が重いように感じる。

「トキ.....」

彌季はそんなトキの気持ちを察して優しく抱きしめる。

「.....っ！」

思いも寄らなかった彌季の行動にトキは硬直する。

「大丈夫ですから.....。わたしたちなら大丈夫ですよ」

人の体温というのはどうしてこんなに安心できるのだろう。

人の鼓動というのはどうしてこんなに安らぐ事ができるのだろう。

人の音吐というのはどうしてこんなに安堵させてくれるのだろう。

だけど.....とも思う。

それは誰でもいいというものでもない。

やはり、心を許せる人でなければならぬような気がする。少なくともトキはそう感じる。

「.....わかった、やってみる」

トキはそう言って、彌季の背中に手を回しギュッと抱きしめる。

「うん.....」

彌季は小さく、だが力強く頷いた。

(なんだか、百合の世界を垣間見たような気分だな.....)

と、言ってしまうえば部外者である三雲は、二人の様子を見てそんな事を思っていた。

「どうなるかわからないけど、やってやるよ」

トキは夏菜をじっと見る。

「絶対に助ける。それまで、なんとか頑張ってくれよ」

それは自分に言っているかのようでもあった。

トキは目を閉じると、夏菜の心の扉を開けるイメージを浮かべる。

この能力に明確な手順はない。ただ、思い浮かべる事。それだけでいい。

だが、それが逆に難しくもある。

見た事のないものを思い浮かべろと言われても、なかなかできないものだ。

だが、それでもやるしかない。

以前にMLTで同じ事をしているので、そう難しくもない。

ただ前回はあまり真剣でなかったといえは語弊になるが、今回とは比べものにならないほど責任というものを感じなかつた。

そういう違ひはあるものの、結果とすれば変わらない。

「じゃあ、入るぜ」

トキがそう言った瞬間、四人は重力から解放されたような感覚になり、一瞬だけ目の前が真っ暗になった。

次の瞬間、四人は夏菜の部屋にいた。

メビウスは相変わらずの無表情なのでわからないが、他の三人はポカンとした表情になる。

「……特に変わっていないようだが……」

三雲は部屋を見回しながら言った。

「失敗……か？」

トキは失敗してしまったと思う。

「いいや、キミの能力は正常に作動している」

メビウスが淡々と告げる。

「でもよ、さっきと変わってないじゃんか」

「そうでもないさ」

と、メビウスはベッドを指す。

それに従うように、三人は一斉にベッドを見る。

「「「———」」」

そして、同時に息をのんだ。

——そこにいたはずの夏菜がいない。

そう、今まで——ほんの数秒前まで確かにそこにいた夏菜が今はいない。

「ここはカノジョの心の中の世界だ」

メビウスはその現実だけを告げる。

「じゃあ、彼女はこの世界のどこかにいる、というわけか？」

三雲がメビウスに訊く。

「おそらく」

メビウスは端的に答えた。

「それで、彼女のいる場所にお前の同類もいるってわけだよな」

「おそらく」

今回も端的に答える。

「残念ながら、ボクも全てを把握してから動いているわけではないのでね。詳しい事はわからない。ただ、その可能性は高いだろうがね」

「なんだかな……」

頼りになるのかならないのか、今ひとつどうしていいものかわからない。

「で、楓夏菜はどこにいるんだ？」

三雲は誰ともなしに訊く。

もっともな質問である。

彼女の部屋にはいない。

だとすればどこだ？

他の部屋ならいいのだが、そんな事はないだろう。

だとすれば、夏菜の心の世界を全て捜さなければならなくなる。

さて、どのくらいの広さかもわからない状況で、本当に見つかるのかどうか……三雲は不安に駆られる。

「ったく……前進したのか留まっているのか、よくわからん展開だな……」

と、ひとりごちる。

「問題のカノジョの事は、カノジョたちに訊いた方が早いんじゃないかい？」

メビウスが二人を見る。

なるほどな……と、三雲も二人を見る。

注目された当の二人は、困惑するばかりでどうしていいのかわからない。

「えっ？ えっ？」

「オレたちだって……なァ？」

狼狽える彌季と、そんな彌季に同意を求めるトキ。

突然話を振られても、正直なところ二人にも皆目見当がつかない。

いや、皆目というわけでもない。

それは三雲も同じだった。

それぞれが思い浮かべた場所——それは、

MLT、

そこしか思い浮かばない。

「もしかしたら……」

彌季が遠慮するように言葉にする。

「彌季、もしかして……」

トキの言葉に彌季は頷いて応える。

「はい。あの場所しか……」

「だよな。オレもそこしか……」

二人は揃って三雲とメビウスを見る。

「もしかして、君たちもMLTだと……？」

確認するように三雲が訊いた。

「はい。夏菜さんがいるとしたらそこじゃないかと」

「っていうか、そこ以外の場所なんてわからねえし」

またMLTなのか……。

しかし、この世界にもMLTがあるのだろうか。

三雲が心配したのはそこだ。

この世界が現実のものと全く同じだという保証はない。部屋を出た瞬間に崖がそびえていても

なんら不思議はない。

ここはそういう場所だ。

いやでも慎重になる。

だがやはり、いくら考えてもMLT以外の場所は思い浮かばないし、そこ以外に適当と思われる場所はないだろう。

ここは、現実と同じ状況だという事に賭けるしかないだろう。

そもそも、特に能力のない自分がここにいるのだ。それだけでも異常なのだから、どうなってもしょうがない。

三雲は自分の中で結論を出した。

「じゃあ、MLTに行ってみるか」

「そうですね」

「それしかないだろ」

「……………」

三雲の言葉にそれぞれが反応する。しかし、メビウスだけは無言のままだ。

「どうしたんだ？」

心配するわけではないが気にはなる。

「いや、なんでもないさ。そうだね、ボクもキミたちに従おう」

「あ、ああ……………」

三雲はどうも釈然としないものを感じたが、メビウスと一緒にいてくれるのはそれだけで有り難い。

この心の中の世界という今ひとつよくわからない世界において、メビウスという異質な存在だからこそ信頼できるものがあつた。

とりあえず敵ではない事がわかっているだけでも充分だ。

危険があるかもしれないという事で、三雲がドアノブに手を掛けた。

ごくりと唾を飲み込み、ゆっくりとドアを開ける。

「……………」

一瞬だけ重い空気が流れたがすぐに緩和された。

ドアの向こうは入った時と変わらない廊下があつた。

とりあえずホッと胸を撫で下ろす。

ここまでは現実と同じか……。頼むから、この先も現実と同じであってくれよ……。

四人は階段を下り、家を出る。

玄関の先も現実と同じ世界があつた。

閑静な住宅街。

人通りのない道路。

「おやおや……」

メビウスがぼつりと呟く。

「どうしたんだ？」

三雲はそれを聞き逃さなかった。

「二人だけのセカイという事かな？」

それは三雲に答えたのか、それとも呟いただけなのか、それはわからないが、三雲はおそらく後者だと思った。

メビウスは三雲たちの方を見ず、すたすたとMLTがある場所へと歩いていく。

三雲をはじめ、トキと彌季もそれに従って歩いていく。

「どういう事だ……？ メビウスはなにを言おうとした？」

メビウスの呟きが頭から離れなかった。

MLTに到着すると、そこは閑散としていた。人の気配が全くないのだ。

「誰もいないようだな」

三雲が呟く。

ここだけではない。ここに来るまでも同じだった。誰とも会わなかった。それどころか、姿さえ見なかった。

つまり――

「この世界には俺たち以外は……………」

「そういう事になるだろうね」

三雲の言葉にメビウスが続いた。

これは見つけやすいのか、見つけにくいのか……。どちらでもあり、どちらでもないといったところだろう。

誰かがいれば訊く事もできる。

誰もいなければ動きがあった場所にいる。

結局は変わらないだろうな。

「とりあえず上ってみようぜ」

トキが口を開いた。

「そうだな。上から探す事も可能だろうしな」

三雲がそれに賛成する。

もともとトキと同じ意見だった彌季は当然の事、メビウスもそれに同意した結果、四人は無人のMLTに入っていった。

しかし、この建物は三十階以上もある建物だ。そこが無人という事は……。

「ダメだ。エレベーターが止まってやがる」

そういう事になる。

三雲にしては珍しく失念していた。

無人なのだから当然の結果のはずなのだ。

「どうするんだよ。ここを歩いてるのはきついで……」

トキは恨めしそうに階段を見る。

階段で最上階まで行く辛さはここにいる誰もが知っている。その道のりは容易なものではない。

「仕方ないね」

そう言うと、メビウスが掌をエレベーターの扉に向ける。その中指には銀色の指環が光っている。その指環は捻れた輪になっている。

メビウスはその指環を抜く動作をする。が、不思議な事に指環は抜けない。しかし、左手にも同じ様なリングがあるのも確かだ。

その二つのリングの間には糸のようなものがわずかに見える。手を放すとリングが空中で揺

れる。

「さて、少し離れていてもらおうか。怪我をさせるのは好まないのね」

死神と呼ばれる存在とは思えないその言葉。

三人はそれに従い扉から離れる。

それを確認したメビウスが一度だけ目を閉じると、そのリングは生きているかのように一直線にエレベーターの扉に向かって飛んでいった。

と、三人が視認できたのはそこまでだった。

次の瞬間には、扉がバラバラになっていた。

「さて、上へ行こうか」

メビウスは淡々と行って扉の方へ歩いていく。

「おい、上へって……扉が開いても電気が……」

「そんなものは必要ない」

そう言うと、メビウスはエレベーターのボックスも同様に破壊した。

「お、おい……………」

三雲は大口を開けて言葉を失う。

トキと彌季もどうしていいのかわからず、その場に立ち尽くしたまま動けない。

三人はそれぞれ金縛りにでもあったみたいになってしまっている。視覚では認知できるのだが、どうも脳の処理がおいつかない。

それ以前の問題かもしれないが、メビウスの行動がサッパリ理解できない。

「さて、行こうか」

そう言うと、メビウスは例のリングとリングの間にある糸のようなもので三人を引き寄せる。

「黙って掴まっているんだ」

状況がわからない三人は言われた通りにするしかない。

そこまでして、三雲はなんとなくわかりかけたのだが、既に遅かった。

メビウスは三人が掴まったのを確認すると、そのリングを上に向けて放った。

リングはあっという間に最上階に到達する。

メビウスは無表情のまま三人を見、次の瞬間、メビウスを含む四人は宙に浮いていた。

本来はボックスが移動する空間をメビウスが移動していく。

三人がいる事を考慮してなのか無茶な速さではない。

それでも恐怖というものは感じるわけで、三人は無意識にメビウスにしがみつ়く。

普通の状況であれば死神と呼ばれている者にしがみつ়くなどという事をするはずもない。が、今は緊急事態で、これしか方法がないのだ。

時間にすれば十秒ほどだろうか、一行は最上階に到着した。

どうやらリングを上を放った時に既にドアを壊していたようで、最上階のドアもバラバラになっていた。

「はあ……はあ……」

心臓が飛び出すかと思った……と、三雲は胸を押さえる。

これは絶叫マシンよりも怖いかもしれない。

もともとそういうものが得意でない三雲だから余計にそう思う。

「なんかオレ、すごい経験してるよな……」

トキは少し嬉しそうにそう言う。

もっとも、それ以前に既に彼女たちは普通の生活では有り得ない体験をしているのだが、それは日常になってしまったのか、こういう事の方が新鮮で刺激的のようだ。

「本当に。でも、できれば二度は遠慮したいですね」

と、彌季が呟く。

だが、上れば次は下りなければいけない。

だからといって階段は遠慮したい。

つまり、もう一度同じように、今度はロープを垂らして下りるのと同じ要領で下りる事になるのだが、今はそこまで頭が回らない。

「さて……」

そう呟いて三雲は最上階を見回す。

彼がここに来たのは過去に一度だけ。それも数日前だ。

全面がガラス張りされたその特殊な空間は、まるで自分が空に立っているように錯覚させられる。

そこはがらんどうとしており、人がいた形跡すらない。

「少なくとも、ここではなにもなかったという事か」

確認するような三雲の言葉にトキと彌季は安心し、そして落胆する。

ここでなにもなかったというのは救いだが、つまりは夏菜はここにいないという事になる。

だとすれば彼女はどこにいるのか。

彼女たちには見当も付かない。

ここMLTでないとするなら何処にいるのか……。

手掛かりがなくなってしまった。

三人は`仲間、であるが、だからといってなんでも知っているような間柄ではない。むしろ知らない事の方が多い。代わりに、今までの友達は知らないような事を知っている。

それは――それぞれの闇。

だからこそ彼女たちは仲間なのだ。

知らない。

その事がどれほど無力なのか。

知ろうとしなかったわけではない。知る事がなかっただけなのだ。

「どうやら糸は途切れてしまったようだね」

メビウスは冷徹ともいえる言葉を吐く。

その言葉を聞いて、改めて無力さを感じる。

「どうすりゃいいんだよ！」

三雲は頭を抱える。

それはオレたちの台詞じゃないか？ と、トキは思ったが口にはしなかった。

「やれやれ」

MLTとは別の場所——境東高校のグラウンドにカレはいた。

その姿は小学校高学年の少年にしか見えない。

が、カレがまとっている空気がそれらしくない。そもそも人間のものとは異なる。

「メビウスはどこに行ったんだか……………」

呆れるようにため息をついたカレは、その名を口にした。

そして視線を屋上へと向ける。

「どうするかな……………」

メビウスはこの場所に来るものとばかり思っていたのに一向に現れない。

「仕方ない、待つか」

そう呟いて校舎内に入ると屋上へ歩き出した。

「そうだ、夏菜さんの学校に行ってみませんか？」

突然の提案をしたのは彌季だった。

行った事はないが、彼女たちが知っている場所はそこくらいしか残っていない。

無駄足になるかもしれないが、なにもせずここにいるよりはいいと判断し、四人は彌季の提案をのんだ。

「しかし、どこにあるんだ？」

と、トキが呟く。

名前は聞いた事はあるが、実際の場所は知らない。そもそも、自分が通う学校以外は全くだ。

「それなら俺が知っている」

三雲は当たり前のように言っただけだ。

「さすが探偵さん」

と、トキはそれを揶揄する。

「決まったようだね。では行こうか」

淡々とメビウスが告げる。

「そうだな――」

と言って三雲は、

「――って、もしかして、ここから下りるのって……」

と、ようやくその方法に思考がいった。

「さあ、急ごうか」

メビウスは当たり前のように三人の身体に糸を巻き付ける。そして、エレベーターがあるはずの空洞に飛び込んだ。

「うわっ」

「きゃっ」

「おわっ」

トキ、彌季、三雲……それぞれの悲鳴と共にあっという間に地上に戻っていく。

着地の際はどうしたのかわからないが、ふわりと羽根でも生えたかのように穏やかなものだった。

「さて、先導は任せてもいいのかな」

MLTを出てメビウスは三雲に言った。

「任せてもらおう」

三雲は自信満々に言うが、内心はどうしたものかと思っていた。

場所は知っている。

だが、問題はそこまでの移動手段だ。

歩いて行くには時間が掛かりすぎる。

「探偵さん、もしかして知らないとか言うんじゃないだろうな」

トキが訝しそうに三雲を見る。

「莫迦にしないでもらおうか。俺だって探偵だ。地理は知り尽くしている」

「だったらどうしてさっきから進もうとしないんだ」

そう言われて、三雲は正直に言う事にした。

「ここから境東までは結構ある。歩いて行くには時間が掛かってしまう」

「……なるほど」

そう言われてトキはあっさりとなんげか納得してしまった。

「確かにボク一人なら構わないが、キミたちニンゲンと一緒にとなると厄介だね」

と、そう言ったメビウスは路上に停まっている車に向けられている。

まさか……と思った刹那。

メビウスはその糸を車に向け———どういう操作をしたのか、当たり前のように、いとも簡単にエンジンを掛けた。

「さあ、行こうか」

それを三人は唖然と見ていた。

あまりの行動にどうしていいものか判断できない。

死神と呼ばれているようなやつが車泥棒とは……。

いや、そもそもここは心の中の世界なのだから気にする事はないのだが、倫理的に納得できない節がある。

だが、今はそういう事にこだわっている場合ではない。ここはせっかくなので車を使う事にした。

「さて、他に車もない事だし、信号も関係ない。………というわけで、とばすからな！」

そう宣言した三雲は、いきなりアクセルを力いっぱい踏み込む。

キュルルルという乾いた音がした。

そして、次の瞬間、車は猛スピードで走り出した。

車はなにも障碍のない街中を疾走する。

三雲の運転が上手いのか、スピードのわりには揺れを感じない。

カーブもスムーズに曲がっていく。

「この調子ならすぐに着きそうだ」

その言葉は正しく、既に境東高校の校舎が見えている。

「ここにいてくれないと本当に手掛かりがなくなるわけか……」

「そんな事になったら、オレたちはどうすればいいんだか……」

「三雲さんもトキさんも、今はそんな事を考えずに信じましょう」

「そうだな」

トキと彌季は互いの手を握りしめた。

「どうやら正解のようだ」

ぽつりとメビウスが呟いた。その視線は屋上に向けられている。

「なるほど、メビウスのお墨付きか。こりゃ禪締めてかからないといけないか」

そう言いながら、三雲はさらにアクセルを踏み込んだ。

あたしはなす術なく茫然としていた。

と、突然屋上の扉が開かれた。

あたしは反射的にそっちを見る。

「————」

そして言葉を失った。

なぜなら、そこにはいるはずのない人たちがいたのだ。

「トキ……彌季……」

そして、メビウスもいる。

って、あの人は誰？

知らない男の人もいた。

よくわからないが、夢ではないようだ。……と、この世界が夢でないと言い切れないのだが。

とにかく、この暗闇に光明が射し込んだようだ。

「夏菜」

「夏菜さん」

トキと彌季があたしに向かって走ってくる。そして、ギュッと抱きしめられた。

「あ、あわわっ」

あたしも嬉しいんだけど、いきなりでどう反応していいものかわからない。

「あらあら、本当に来ちゃったんだ……」

「キミがシュピーゲルかい？」

そんなあたしたちを無視してメビウスとシュピーゲルが会話を交わしている。

「キミはセカイを歪ませる存在のようだね」

そう言ってメビウスは右手をシュピーゲルに向ける。

「残念だけど、この鏡を割る事は不可能なんだけどな……」

シュピーゲルは慌てる事なく余裕綽々でかまえる。

メビウスはその言葉に耳を貸す事なくリングを放つ。

——カンッ！

と、拍子抜けするような音がした。

呆気なくメビウスの攻撃は跳ね返された。

「マジで……………」

さっきも言ってたけど、本当に効かないなんて……。

一縷の望みはどこへいった！

メビウスが来たからなんとかしてくれるんじゃないかと期待したのに……。

あー！ もー！

「おいおい、どうなってるんだよ」

三雲も狼狽えている。

「やれやれ、どうやら今回はボクは無力のようだ」

飄々とそう言っただけのものだから、三雲はなにも言えなかった。

「諦めたらどう？ 抵抗するなんて無駄。無意味。このまま闇に飲み込まれればいいんじゃないの？」

シュピーゲルが不敵に笑う。

が、次の瞬間！

青い光が一瞬見えた。

――パキュッ！

そんな音がした。

「えっ……………」

目の前の鏡に穴が空いていた。

「どういう……こ、と……………」

そのままシュピーゲルがくずおれた。

その姿が知っている姿に変わっていく。

「鏡琴さん……………」

何度か会った事があるので知っている。

光月圭一郎の娘である光月鏡琴がそこにいた。

「どういう事？」

あたしは混乱していた。

オプスキュリテは威仁君だった。

そして、今度は……………」

「光月鏡琴か……。この前のMLTで行方不明とされていたが、こういう事になっていたとはな……。さて、シュピーゲル。姉の麻琴さんはどこにいるんだ」

三雲がうずくまるシュピーゲルに訊いた。

「……………このニンゲンの姉だと？」

シュピーゲルは、ふっと笑った。

「ずっと前に死んでいる」

「なっ……………」

三雲は驚きを隠せなかった。

「どういう……」

確かにMLTにはいたはずだ。でなければ行方不明の情報が出るはずがない。

「あの姿が鏡像だとでも言えば納得してただけで？」

それだけを言い残してシュピーゲル――光月鏡琴は消えた。

三雲をはじめ、四人はその光景を見ているしかできなかった。

だが、メビウスだけは違う場所を見ていた。

「あの一撃——なるほど、目覚めているのか、インプルス」

その眩きは誰にも聞こえなかった。

どうしてこうなったんだろう……。

どうしてアタシはこんな事になってるの？

どうして消えそうになってるの？

どうなってるの……？

消えゆく意識。

消えゆく身体。

消えゆく存在。

消えゆくそんな中で、アタシはあの時の事を思い出していた。

三年前——もう、三年も経つんだ。

『今日はムーンライト・タワー完成記念式典にお越し下さいまして、誠に有り難う御座います。お世話になっております各企業の皆様、高い倍率の中見事に当選されました皆様、ようこそお越し下さいました。わたくし、アビリティィー・ムーン株式会社代表取締役社長の光月圭一郎と申します。今日は天気にも恵まれまして、日蝕もよく観察できる事と思われます。まさにこのムーンライト・タワーの存在意義があるイベントになるものと思われます。今日は、肩肘張らず、気楽な気持ちでお過ごしいただけますよう、心より願っております。今日は誠に有り難う御座います。どうぞ楽しんでいって下さい』

「さて戻ろうか」

どういうわけか事態は収束した。

納得はいかないものの、あたしたちは探偵さんらしい男の人に言われるがままに能力を解放して元の世界に戻った。

どうしてあの時シュピーゲルが倒れたのか。

メビウスでさえ壊せなかった鏡を一瞬で貫いたのはなんだったのか、あたしにはなにもわからない。

ただわかるのは終わったという事だけ。

終わってみれば呆気ない幕切れ。

とにかく、あたしのウジウジした気分は吹っ飛んだ……………気がする。

ひとつわかった事——それは誰にも闇はあって、それは消えないものであって、それに飲み込まれないようにするという事。

それでいいと思う。

MOBIUS 一鏡の幻惑師一

<http://p.booklog.jp/book/87845>

著者：芳田尚哉

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/studiosaix/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/87845>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/87845>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ